

第三章

一

アス・ウィアンの外壁を囲むように、周囲の草原に北方軍第二軍中隊千騎が展開していた。重装歩兵を中心とした屈強な兵士達は、アス・ウィアンの街から柵引く幾筋もの煙を視界に捉えながら、進攻の号令を今や遅しと待っている。

街の内部の様子は城壁に阻まれ、この場所からは見て取る事は出来ない。だが、先日のエザムと同じような状況であろう事は、立ち昇る煙から想像できた。兵達の間には、戦いに逸る気持ちとバインドに対する怒りが満ちていた。

陣の中央に張られた本陣では、先程から指揮官カシムや参謀官、少将等が集い軍議を行っているが、まだ動く気配はない。

一人の兵が逸る気持ちを表すように、腰に帯びた剣の鞘を叩き、鎧に打ち付ける。規則的に叩かれるそれが、やがて輪のように広がり、アス・ウィアンの敵を脅かさんとするように、雷鳴のごとく響き始めた。

「——馬鹿な！ 公は何を考えておられる！」

本陣の幕中で、中將カシムは憤りのあまり、手にしていた剣を足元に叩き付けた。たった今、伝令がアスタロトの指示を運んできたのだ。

『レオアリスが着くまで、陣を展開させ、そこで待て』

「手を出すな、と……」

腕の血管が浮き上がるほど両手を握り込む。周囲からは兵士達の剣を打ち付ける音が、幕内の会話を掻き消すように響いてくる。

バインドが目前に居るのは分かっている。アス・ウィアンの警備兵を殺害し、その後は街に入ったまま動いていない。

「あのガキに、譲れと……!?!」

足でそこに置かれていた衝立を蹴り上げる。衝立は激しく音を立てて倒れ、側近達はびくりと身を縮ませた。

もともとカシムは気性の荒い将だ。先日バインドによって焼かれたエザムはカシムの管轄でもあり、名誉挽回を期して功を焦る気持ちも強い。

(バインドをこの手で討てば、名を上げられる。それを、ただ待てだ?)  
 剣士がどれ程のものかというのだ。自分とて剣にそれなりの自負がある。更に千もの重装歩兵を擁して、何の不足があると言うのか。

「ここは、公の仰るとおり、様子を見るしか」

恐る恐る、北方二軍の二等参謀官ノーマンはカシムの顔を見上げた。その弱腰と映る態度をカシムは憎々しげに睨む。剣士と聞いて以来、この男はやけに慎重策ばかり説き、それもカシムの苛立ちに拍車を掛けていた。(老いぼれめ)

だが、命令に反するか？

規則正しく、雷鳴は轟いている。

(……いや、倒せばいい事だ。命令に背いたも何も関係ない。あの方は、所詮あまり多くを気にされぬ)

カシムは、荒く息を吐くと、ノーマンに眼を向けた。

「包围を狭め、三方の門より討って入る」

「し、しかし……」

怒りに満ちた眼で、カシムはノーマンを睨み付けた。

「しかしだど?! では貴様は、ここで間抜け面を晒して笑う者になるか！ 北方二軍はたった一人の敵を囲むだけで、手も足も出なかったと?!」

「そ……」

「さっさと行って全軍に伝えよ！」

「は——はっ」

慌てて伝令を呼ばわりながら駆け出していく後姿に舌打ちをし、カシムは剣を取り上げた。

すぐに、全軍が移動を始める。外壁の三方の門に向かって、三隊に分かれて重い足音を立てながら進行していく。アス・ウィアンはすぐ背後に深い森が迫り、門を持つのは北、東、南の三方だけだ。

門を守る警備兵は、全てバインドによって切り裂かれ、辺りに転がっていた。その様を横目で眺めながら門を抜け、兵士達の列がひしめきながらアス・ウィアンに入る。

折り重なった死体。それは何か、どこかが異様で、兵達の間には正体の知れない不安が過ぎった。

街並みはまるで大きな鈍でも振るったかのように壁は切り崩され、焼け落ちて煙を上げている。狭い石畳のそこかしこに住民達の死体が転がっている。街の中には進軍する兵列の他に、動く影は見あたらなかった。

アス・ウィアンはそれほど大きい街ではない。だがそれでも、その光景には兵達の怒りを急速に冷ますような、心胆を寒からしめるものがあつた。「……本当に、これを一人でやったってのか……？」

歩兵の一人が厚い頬当ての奥で呟いた言葉は、等しく兵達の心の中に浮かんだ疑問でもある。

極力崩れた家々を、倒れている人々を見ないように前を向き、兵列は重い足音を石畳に打ち鳴らしながら進んだ。視線の先には先頭に騎馬を立てて進む、中将カシムの姿が映る。

その堂々たる姿は兵達の心を鼓舞し、不安を打ち消すのに十分なものだ。きつく傲慢なところがあつたはするもの、殊戦場においては、カシムは十二分にその将たる所以を示している。

カシムは兵列の先頭に立ち、苛立ちを隠さない瞳で街の中央に聳える塔を睨んだ。その塔の上屋に、隠そうともしない気配があつた。

バインドは街の中央に聳える塔の屋根に座り、軍が街中を三方から進んでくる様を面白そうに眺めた。

「動くか。愚かな奴等だ。損害を増やすだけだと、判断できる将もいないのか？」

足下の街からは、炎の起こす煙と肉の焼ける臭気が立ち昇ってくる。低く笑つた。

既に正規軍はバインドの足元の広場を埋め尽くそうとしている。くつくつと、喉の奥に湧き上がるそれは、次第に狂気を孕んだ哄笑に変わる。

「何がおかしい」

背後の気配に振り返る事もなく、バインドは笑い続ける。カシムはバインドが振り向かない事に痺れを切らして、剣を抜き放つた。

「貴様がバインドか。俺は正規北方軍二軍中将——」

「誰でもいい」

「何だと?!」

「切り刻めるなら、構わんよ。兵は何騎だ? 五百か、千か——。多い方がいいなあ」

「ふざけ……」

紅い熱が、幾筋も走つた。

振り上げようとしたカシムの剣と、二人の間に伸びる煉瓦作りの塔の屋根が、音を立てて砕ける。バインドは一切振り返らないまま、再び笑い出した。

時を止めたように立ち尽くしたカシムの身体に幾つもの亀裂が生じ、ずるりと崩れた。次の瞬間赤い炎に包まれ、燃え上がる。

「——クククク……ハ! ハハハハ! 手応えの無い分、思う存分切り刻ませてくれよ!」

地上に落下したカシムの破片を追って、バインドの足が屋根を蹴る。上空から炎に包まれた身体の部品がばらばらと降りかかり、言葉を失つた兵士達の真ん中に降り立った。

広場を取り囲んだ兵士達は、何が起こっているのか全く理解出来ないまま、ゆっくと立ち上がる男と、燃える身体の破片を見つめる。

バインドが歪んだ笑みを頬に刻んだ。

兵達に剣を構える暇も与えず、左足を軸に円を描き、バインドの剣が一閃する。

バインドの周囲の兵士達が、雪崩れるように外に向かって倒れた。切断された面から噴き出すはずの血はなく、肉の焼ける音と臭いが辺りに漂った。

「……ひっ」

たった一刀が切り裂いた結果を目の当たりにして、兵士達が一気に浮き足立つ。

バインドは崩れた兵列に向かって地を蹴った。

もはや戦場とは呼べない。それは一方的な殺戮だった。

焔を纏った剣が翻る度に、腕が、脚が、首が、撥ね上がる。傷口から血が流れないが故に、それはどこか、ひどく作り物めいて見えた。

二つに割られた胴が燃え落ちる。身体を守る分厚い鎧など無いかのごとく、まるで人形の手足を落としてでもいるかのように、バインドは無造作に剣を振るう。瞬く間に、その場に切断された身体の山が築かれていく。

バインドが足を進めることに、血を流す事のない死体が列をなす。

一つの鎧も身に纏わないにも関わらず、バインドは平原を行くがごとくにただ歩みを進める。

無防備とも思えるその背に、数人の兵が恐怖に震える腕を鼓舞し、一斉に剣を突き立てた。

一瞬、バインドの動きが止まる。逃げ惑っていた兵達が、息を飲んで佇んだ。

「やった……」

バインドがゆるやかに振り向くと同時に、突き立てた数本の剣が根元から砕けた。

喜びに見開かれた眼が、一瞬の内に驚愕に取って代わった。

低い忍び笑いが耳を打ち、歓声を上げようとしていた兵士達の口から、恐怖に迫られるように悲鳴が上がる。

先程よりも散り散りに、統率すらなく、兵士達は走り出した。

それを悠然と追い、既に戦う意志を失った兵達を、バインドは動きを止める事なく刻み続ける。

顔に浮かんだ、狂気のような笑み——。その瞳が、ふと見開かれた。

喜色がそこに踊る。

兵の一人を切り裂く寸前で、剣が動きを止めた。

「来たか——」

笑みが、深まる。

上空で、何かが陽光を銀の矢のように弾いた。

そこから叩きつけるような風と共に、青白い光が尾を引いて地上に急降下する。

バインドの、真上——。

撥ね上がった炎の剣が、閃光となって撃ち込まれた青白い剣を受け止めた。

剣と剣とが撃ち合った瞬間、爆発したかのように突風が吹き上がった。

周囲に残った兵士達が、爆風に押されて石畳の上に倒れ込む。

顔を上げ、突風の中心に視線を向けた兵士達の顔に、漸く安堵と希望の光が灯った。

「……ああ——」

呻くような歓声が、残った兵士達の間にと広がっていく。バインドは合せた剣の向こうにレオアリスの姿を捉え、口元の笑みを広げた。

「……待っていたぞ。あんまり遅くて、食い尽くすところだった。」

剣を合せたまま、レオアリスは周囲に視線を走らせた。転がった兵士達の身体と、恐怖と憔悴の貼りついた顔。肉の焼ける、吐き気を催すような臭気。

怒りが、黒い瞳に灯る。

「——貴……様ア」

「クク、楽しい光景だろう？」

弾くようにバインドを睨み、レオアリスは剣に乗せた力を緩めた。

押さえを失ったバインドの剣が撥ね上がるのに合せて、青白い切っ先が紅い刀身の上を滑る。踏み込み、手の中で剣を反し、空いた左脇腹を斬り上げる。

僅かに切っ先に掠めた感触だけを残し、バインドが後退する。それを追って間合いを詰め、左から剣を薙ぐ。迎え撃ったバインドの剣が大きく弾か

れた。

瞬間叩き込まれた剣を躲し、バインドは地面を蹴って距離を取った。それまでバインドが立っていた地面が、レオアリスの剣の余波を受けて大きく陥没する。

バインドはそれを眺め、ゆらりと立ち上がった。

恐れて離れたのではない。その瞳にあるのは、紛れもない喜びだ。

「……ずいぶん長い間、この時を待ってたんだけ。この右腕を失ってから、十七年……。楽しみで、仕方なかった」

バインドの身から叩きつける剣気が、ビリビリと大気を振動させる。自分の頬を叩く風に黒い髪を巻き上げながら、レオアリスは一步、バインドへと踏み出した。

右手に無造作に提げた剣の青白い光が、じわりと大きくなる。

相手から一瞬たりとも視線を動かさず、互いの間合いを計る。二人の纏った剣気がぶつかり合い、渦を巻いて周囲の石くれを砕いていく。あまりの鬼気に、周囲を囲む兵士達が後退った。

呼吸すら苦しいほどの静寂が落ちる。

バインドの剣が僅かに動いた瞬間、ふ、とその瞳がレオアリスの後方に向けられた。

遙か彼方から、強烈な圧力の塊が近づいてくる。炎の気配だ。

「ち、アスタロトか……。さすがに二人相手はきついなあ」

十七年も待ったのだ。誰にも邪魔をされず、ゆっくりと戦える方がいい。

「残念だが、仕切り直しだ。」

「つぶさけるな！」

「謎掛けは解いたのか？」

嘲るように問いかけたバインドの言葉に、レオアリスは息を詰めた。バインドが口元を歪める。

「その様子じゃまだだなあ。クク、随分と大仰な事だ」

「……戯言ばかり」

苛立ったレオアリスの言葉を皆まで聞かず、バインドは挨拶代わりだともいうように、レオアリスの左後方に居た兵士達めがけて、剣を討ちこ

んだ。

「！」

咄嗟に伸ばされたレオアリスの剣が、辛うじてその刃を弾く。剣の勢いを殺しきれず、レオアリスは弾き飛ばされるように後方の兵士達の間に倒れ込んだ。

「そうだなあ……一番相応しい思い出の地で、再び会おうか」

「っ」

頭を振って立ち上がった時には、そこにバインドの姿は無かった。

「――」

苦い溜息を吐き、バインドの気配が完全にその場から去ったのを確認して、レオアリスは上空を振り仰いだ。

全てが解決すると、そう思ってここに来たものの、結局何も変わっていない。

（何も問い質す暇も無かった……）

そんな余裕など見当たらなかったと言った方が正しいだろう。数合剣を合わせただけで、まだレオアリスにはバインドの力を計りきれしていない。

レオアリスは自分の剣に視線を落とした。

（これだけじゃ無理か）

空いている左手を、鳩尾に当てる。もう一つの鼓動が、微かに感じられる。

「――」

瞳を閉じ、抑えるように息を吐いた。右手の剣が掻き消える。

さっと陽が翳り、飛竜の翼の羽ばたきが大きく風を散らした。視線を上げると、艶やかに磨き上げられた濃紺の鱗をした飛竜が、レオアリス達の上空に浮かんでいた。

その背からアスタロトが飛び降りる。軽やかな動作で地上に降り立つと、上空の飛竜に向かって手を振った。

「ありがとな、アーシア」

飛竜の青い瞳が頷くように細められる。

アスタロトは辺りを見回しながら、どこか呆れた表情すら浮かべてレオ

アリスの横に立った。

「これは予想以上だな。お前が間に合って良かった」

「……これじゃあ間に合ったとは言えない」

低くそう返し、レオアリスはまだ呆然と蹲ったままの兵士達に歩み寄った。見覚えのある顔を見つけ、その前に膝を付く。

老齢に近いその男は確か、北方二軍の参謀官だったはずだ。覗き込んだ目には怯えた色がある。

正規二軍は勇猛で知られる。それが、これ程とは――。

「動けるか」

「は、はい」

「良かった。カシム、だったか？ 二軍の将は。どこにいる？」

ふいにノーマンの眼の中の怯えが大きくなった。両腕が何かに縋ろうとするように、レオアリスの腕を掴む。アスタロトと顔を見交わし、レオアリスはノーマンへ視線を戻した。

「ちゆ、中将は……あ、あの男、あつという間だった――まるで、紙でも切るみたいに、あんな」

レオアリスの腕に縋る手の指が、軍服の厚い生地を通して強く食い込む。その力から感じられる恐怖。

だが、背後に広がる悪夢じみた光景を見れば、それは無理もない事といえた。

「……ひどい有様だ。全滅を免れただけでも、幸いと言うべきか」

ノーマンの身体の震えが一層強くなり、レオアリスの腕に伝わる。レオアリスは戦場に向けていた視線を戻した。聞き取るのがやっとの声だった。

「あ、あの時、全滅したのに――北方辺境軍、師団第二大隊……手を出すべきじゃなかった」

レオアリスの瞳が陰しくなる。肩を掴み、虚ろに見開かれた瞳を覗き込んだ。

「どういう事だ」

「あの男が……師団の。味方の軍を、全部」

突然、燻っていた柱が音を立てて崩れた。虚ろな瞳がさっと焦点を結び、

呆然と座り込んでいたノーマンは跳ねるように立ち上がると、アスタロトに向かつて敬礼した。

「ご、ご無礼を！ ご報告いたします、我が隊は正午丁度を以ってアス・ウィアンの三方の門より入り、街の中央の塔で目標を包囲、しかし――」

「……私は、手を出すなど伝えたはずだったんだがな」

アスタロトが声を落とす。

「も、申し訳ございません！」

「――まあいい。カシムが死んだ以上、責を問う奴もいない。それより」

ふいに遠くが騒がしくなる。南の空に靡いた軍旗に、近衛師団が到着したのだと判った。

ヴィルトールは飛竜の背から飛び降りると、先程のアスタロトと同様、周囲の光景に信じられないといった表情を浮かべ、レオアリス達の方へと歩み寄った。

足を打ち鳴らすように姿勢を正すと、左腕を胸に当てる。後ろで纏めた長い灰銀色の髪が揺れた。

「御前に、上将。右軍全騎揃っております」

もう一度、ヴィルトールは厳しく眉を寄せたまま周囲を見回した。

「が……どうやら援軍よりも救護班が必要のようですね」

「まずは生存者を探して手当てを。……死者は、どうする？」

後の言葉はアスタロトに向けたものだ。

「多すぎるな……。後から一隊を寄越そう。生きてる奴から頼む」

ヴィルトールは頷くと広場にいた師団少将を呼び、手短かに指示を出していく。

レオアリスは目の前の将校に瞳を向けた。その上には先程までの取り乱した怯えの色よりも、軍の失態とアスタロトによる叱責を恐れる、ある意味正常な感情しか見出せない。

レオアリスの視線に気付き、ノーマンは何かを恐れるように視線を逸らした。

（――同じか）

グランズレイ、総将アヴァロン、それから軍議の間で感じたあの空気と。

おそらくもう問い糺しても口を開くまい。

師団兵に肩を支えられながら退出するノーマンの後姿を、レオアリスは黙ったまま見送り、拳を握り締めた。

『全滅した——北方辺境軍、師団第二大隊』

『味方の軍を……』

アスタロトはその横顔を暫く見つめていたが、どこか怒ったような表情を浮かべ、視線を街に逸らす。

肉の焦げる重い匂いが、吹き抜ける風に散らされる事を拒むように、いつまでも漂っていた。

一一

アス・ウイアンから戻ったその足で、アスタロトは王宮内の一角、内政宮へと向かった。内政宮は王城の北面三階層までを占め、三階層の最奥に内政官房長官室がある。

「これは、アスタロト公」

長官室の扉をくぐると、すぐ脇に据えられていた机の奥で内務秘書官が顔を上げ、アスタロトを認めて素早く立ち上がる。

「本日はいかがされました」

「うん。ベールはいるか？」

「執務室においでです」

「ありがとな」

アスタロトがいきなりやって来る事などいつもの事で、内務秘書官は特に用向きを確認する事もなくそのまま見送った。

長官の執務室は広い室内の奥に位置する。秘書官達の机や個室が並ぶ室内を通り抜けながら、アスタロトは長官室の手前のひと部屋が空室表示なのを認めた。

（——ロットバルトの親父がいないな）

ロットバルトの父、ヴェルナー卿は内務——内政官房の次官、つまりは官房長官たるベールの補佐を努める。その事が少し気にかかったものの、特に足を止める事無くベールの執務室前まで来ると、アスタロトはおとないも告げずに扉を開けた。

「入るぞ」

「入った後に言う言葉じゃあないな」

広い黒檀の机の向うで、内政官房長官ベールは知性を湛えた静かな瞳を上げた。目を通していた書類を脇に押し遣り、ずかずかと執務机の前まで歩み寄るアスタロトに身体を向ける。どこか怒ったようなアスタロトの表情に、ベールは僅かに眉を上げた。

「今日は何の用だ？」

机の前まで来て立ち止まるかと思えば、アスタロトは部屋の中をぐるぐ

ると歩き出した。

ベールが扉の脇に机を置いていた長官随行官へ顔を向けると、秘書官は黙礼して扉を出た。扉が閉まるのを視界の隅に移しながら、アスタロトは腕組みをして尚も歩く。

アス・ウイアンのあの光景。エザムは見えていない。だから正直、それほど怒りも湧かなかった。だが、あれほどまでに踏みじられた街は、アスタロトの心にも、少なからぬ怒りを生んでいる。

レオアリスの疑問、バインドについて何かを伏せるような軍内の様子、それもあつたが、何よりさほど関心を示していなかった自分に対する憤りだ。

『北方辺境軍の全滅』

(知らなかったって?)

「バインドについて、知ってるか」

アスタロトの単刀直入な質問以上に、ベールの回答は簡潔だった。

「知っている」

最初は何だかんだと躲されるだろうと予測していたため、アスタロトは思わず立ち止まってベールを見つめた。力づくでも聞き出してやろうと気合を入れてきたのが馬鹿らしい程だ。

「……今回の件じゃないぞ」

「驚く事か。北方は私の管轄だ。それでお前も来たんだらう」

「だって、……秘密なんだろ」

アスタロトが睨むとベールは再びあっさり頷いた。

「そうだ。だがお前のは不勉強というやつだな。正規軍を統帥する将として当然知っているべき話だらう」

一つ笑うとベールは立ち上がり、アスタロトに長椅子を勧め、自分も向いに腰を降ろす。

「解ってるよっ」

乱暴に腰掛けると、弾力性のある厚い綿のせいで長い黒髪が跳ねた。

ベールの言うとおり、本来自分の立場なら知っていなければおかしい位の話だ。誰も教えなかったからと言うのは甘えだらう。『アスタロト』とし

て正規軍の将の座に着いた時、過去を紐解くのはアスタロトの義務だったのだ。

縛られたくないという思いから、自分は色々なものに眼を瞑っているのかもしれない。

ベールは怒ったようなアスタロトの顔を眺め、意外そうな表情を見せる。「なにやら反省をしているようだな。まあそう腐るな、これについては何もお前の所為だけでもない。誰もが口に出すのを憚る事だったのだから」

「憚る、か。憚ってばかりいちや、物事ずつと事態が悪くなる事だつてある。知らせないことにそんなに価値があるのか？」

レオアリスのあの表情。苛立ちと、おそらくは不安。周囲があれでは、誰だつてそれを感じるだらう。

(……私だつて変わんないじゃないか)

アスタロトは苛立ちをぶつけるようにベールの顔を睨んだ。

「お前が知ってること、みんな話せ」

ベールは目の前の紅い瞳を覗き込んだ。アスタロトが自分から聞いた話を、レオアリスに伝えるつもりなのはその瞳の色から分かる。ベールはどこか複雑な色の交じった笑みを浮かべた。

「聞けば、お前は迷うだらう。それでも聞くか？」

聞いたところでお前はそれを飲み込めるのかと、そんな問い掛けに聞こえる。だがアスタロトは少しの逡巡も見せずに、挑むようにベールを見上げる。

「迷うかどうかなんて聞かないと判んないだろ。教えろ」

自分を睨み据えるアスタロトの顔を見つめながら、ベールは束の間思考を巡らせた。

王は既に、半ばその命を解いている。ベールは一つ頷いた。「よろしい。それもお前の責務の一つでもあるだらう。——では、何から聞きたい？」

長椅子の上で足を組み、正面から瞳を覗き込んでくるベールの前で、その声の響きにアスタロトはこの時になって僅かに躊躇った。自らに決意を促すように小さく息を吸い込む。

「……十七年前、何があったのか。それと、バインドが何者なのかだ」

ロットバルトは明るい日差しが降り注ぐ、幾重にも折れ曲がった硝子張りの回廊を歩き、その最奥にある豪華な扉の前で足を止めた。

広大な敷地内に設けられたこの離れは、邸内の者も用がない限り訪れる事はない。回廊と離れを包む庭園も、午後の白い光の中にひっそりと静まり返っている。

名乗ると、中から低い声が応えた。

溜息を一つ吐き出し、精緻な彫刻の施された取っ手を回して扉を押し開けた。広い室内にも、回廊と同じく白い陽光が満ちている。その中を、正面の机の奥に座る男の方へ足を進める。

厳めしい壮年の男だ。十ある侯爵家の筆頭に位置し、四大公に継ぐ地位を誇る大貴族。がっしりとした身体を幾重もの長衣に包み、泰然として椅子に腰かけたまま、男は机越しにその少し前で立ち止まったロットバルトを眺めた。

ロットバルトは男に一礼すると、その顔を見返す。

この場に全く見知らぬ第三者がいたとして、彼等が血の繋がりのある親子だと言っても、俄かには信じがたいだろう。姿形ではなくその上辺からは、家族の中にあるはずの暖かさはまるで感じられない。

「珍しいですね、貴方がわざわざ私をお呼びになるなど」

「……元氣そうだな。兵舎などに入らず、この館から通えばよいものを。」

ヴェルナー家の子息が何を好き好んでそのような場所におけるのか。会う度に聞かされる言葉に、ロットバルトは僅かに笑みを浮かべただけで取り合う様子はない。もう既にそれを言う事を信条にしているのではないかとさえ思えるほど、それは決まりきった会話だ。ロットバルトの答えもまた、常に変わらない。

「何のご用です。私も既に役を頂いている身なのでね。いつものように軍を辞めるといってお話であれば、これで退出させて頂きますが。既にご存じ

でしょうが、今はこうしている時間も惜しい」

それだけ言うとおつさりと踵を返しかけた息子に、侯爵は苦い声を向けた。

「だからこそ呼んだのだ。事態が好ましくない方向へ向えば、第一大隊の立場は微妙なものになる。わしとしてはその時、そこにお前を置きたくないというのが本音だ」

そこには普段の挨拶のような会話とは違う響きがある。ロットバルトは再び身体を戻し、侯爵の表情の奥にあるものを見透かそうとするように、向けた眼を細めた。

「……あなた方は、一体、何をご存知なのです？ バインドと上将について、何を隠そうとしているんです。それが判らない以上、何を仰られても無意味でしょう」

「——お前達は若く年も近い。同調するのも判るが、全体を眺めた時、何が一番良い選択かを見極める事が必要だ」

問題にならないというように、ロットバルトは一度顔を背けた。

「その全体を眺める事が、現在出来る状態に無い、と申し上げているのですよ。中途半端に隠すのはお止めなさい。判断をしると仰るのであれば、それ相応の材料を提示していただきたい」

「提示すれば、わしの言葉を呑むか？」

「伺った後で判断します」

侯爵は暫らく無言のまま、指先でコツコツと机を鳴らしながらロットバルトに視線を注いでいたが、まるで変わらない表情に、苛立ちの交じった息を吐いた。

「——お前は、今回の件について、どこまで知っている？」

「全く。ほとんどと言っていい程、情報が伏せられている。そもそも、バインドとは何者なのです」

侯爵はその名を疎むように、灰色の眉をしかめた。

「——あれは、十七年前まで、近衛師団第二大隊の中將だった男だ」

「十七年前にあったのは、反乱だ」

ベールがアスタロトの反応を見るように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。黒く深い瞳の奥に、捉えどころのない微細な光が浮かんでいる。

「北方の——、剣士の一族のな」

一瞬、周囲の音が途切れたように感じられた。

アスタロトはベールの言葉の意味を図りかねたように、深紅の瞳で目の前の顔を見つめた。

長い睫に縁取られた瞳が、大きく見開かれる。

ベールは皮肉な笑みを口元に刷き、頷いた。

「そうだ。反乱を起こしたのは、レオアリスの一族だった」

アスタロトの唇が喘ぐように数度動く。

「——そ……え、だって、あいつは」

思わず立ち上がりかけ、アスタロトは再び腰を落とした。言うべき言葉を見失って口を閉ざし、ほっそりとした手を額に当てる。

喉の奥が詰まる。肺が酸素を取り込むのを止めてしまったように思える。

「それはもう少し後で触れよう。——その反乱を収める為に向けられた軍の中に、バインドがいた。近衛師団第二大隊左軍中将。戦場にあった北方辺境軍及び師団第二大隊、合わせて二千余名、その半数以上を切り裂いたのもまた、バインドだ」

広い室内は午後の白い陽射しの中に沈んでいる。降り注ぐ陽射しは、それを受ける者の影をくつきりと浮かび上がらせる。そこに作り出される光と影。

この場で侯爵の口から語られる言葉は、その影をより一層際立たせようとするかのようだ。

「剣士は稀な存在だが、戦闘能力は群を抜いている。それが、何故軍にレオアリスの他に存在しないか、お前は解るか？」

それは先日、ロットバルトやクライフが感じた疑問でもあった。ロットバルトが黙ったまま否定の意を表すのを見て、侯爵は言葉を継いだ。

「そぐわないのだ。剣士は戦う事そのものが存在理由、本能だ。軍規や隊内での協調を守る事に向かない。時に生よりも、戦う事を好む。——そしてバインドは、その本能が最も顕著な男だった」

侯爵はロットバルトの顔から、白い光に溶ける窓へと視線を移した。

バインドが師団に所属していた折、数度見かけるだけだったにも拘らず、バインドは周囲に不快な感情を抱かせるように思えた。特に言動が荒い訳ではない。だが——そう、まるで周囲の者を、物として捉えているような眼。

単なる切り裂く対象として。

しかし、それでもあの頃のバインドは、かろうじてその本能を抑え込み、軍の中に自分を抑え込んでいた。

あの時までは。

ベールはアスタロトの顔に視線を注いだまま、一つ一つの言葉を繋ぎ合わせるように紡いでいく。

「同じ剣士と戦う事は、確実にバインドの中の何かを呼び覚ましたのだろう。反乱を抑える為の軍は、途中からバインドを抑える為のものに変わった。だが、結果は先程も言ったとおり。二千余名の内、誰一人、北方の辺境から生きて戻る者はいなかった」

黙り込み、俯いたままのアスタロトを前に、ベールは非情とも取れる響きで淡々と言葉を紡ぐ。

「その名は禁忌だ。誰もが口を嚙む、忌むべき名なのさ。そして以来、軍において剣士もまた禁忌となった」

「――戦いは、唐突に終わった」

それは近衛師団が北方の辺境に到達して、一日も経たない内の事だった。「バインドは忽然と消え、炎の上がる剣士の一族の里、そこに一人の赤子がいたのだ。剣士の一族の、最後の一人だ」

侯爵は蒼い眼に苦い色を灯して、目の前に立つロットバルトに向ける。降り注ぐ陽射しが、まるで温度のないものに感じられる。

「もう一度言おう。バインドが再び現れた今、わしはこれまで以上に、お前が師団にある事を望まない。今は何も知らずとも、いずれ過去を知れば、その剣は王に向けられるかもしれないのだ」

侯爵は言葉を切ると、ロットバルトが頷くの待った。途中から一言も口を挟まずに話を聞いていた。おそらく、自分の意思を理解するだろうと。

だが、意に反してロットバルトは苦笑を浮かべた。

「あなた方は、少し観察が足りないようだ」  
「何を」

「王に剣を向ける？ 間違っても、それは起こり得ない」

レオアリスの中に見える王への忠誠の念は、自分達のそれとは少なからず次元を異にする。それが何の故であるのか、ロットバルトが明確に把握している訳ではない。

だがレオアリスの持つ感情は地位や立場から出たものではなく、それを知っているからこそロットバルトには、また周囲の者達には誰しも、レオアリスが王に離反する事は有り得ないと言うだけの根拠になる。

ロットバルトは侯爵の顔を眺め、全く別の事を口にした。

「午前中に、ヴィルトール中將を喚問されましたね」

侯爵は黙ったまま、不機嫌そうな眼をロットバルトに向けた。

「それで、ミストラの一件に関する中將の証言に、貴方が確信を得られるような内容がありましたか」

「……私が直接聞いた訳ではないが、疑念が深まるものではあった」

「王に対しての翻意があるか？」

問題はそこだ。もし今、僅かなりとも周囲がそれを認めれば、レオアリスは王都を追われる事になるだろう。

だが、自分をこうして呼ぶ事しかしていない以上、可能性の範囲を出ていないのだ。疑念をどう解消すべきか――ロットバルトは思考を巡らせる。

「今の時点では無いだろう。だが、知った後ではどうなるかは判らん」

だからこそ、事実を伏せ、十七年を経た今でさえ疑念を棄て切れないでいるのだ。だがロットバルトはあくまで穏やかな口調を崩さないままだ。

「では現時点では、まだ懸念の範囲を出ていないと言う事ですね。」

敢えて念を押すように、侯爵の瞳を覗き込んだ。

「確信が変わってからは遅いのだ。可能性が無いとお前に言えるのか？」

「勿論可能性は無いではないでしょう。ただ、今お聞きした限りでは、まだ反乱に至った経緯が明確になっていません。そこに関しては調査はついでいるのですか」

「詳細は不明だ。何の前触れもなく、不意に始まったものだからな。」

レオアリスの育った村の者が何かしら知っている可能性は高いが、調査上は取り立てた結果は出ていない」

「……成る程」

微かに笑みを零したロットバルトの顔を、侯爵は不審そうに眺めた。

「尚更、あなた方は調査不足ですよ」

あの村で育った事それこそが、レオアリスの中に生まれるべき負の感情を消しているとも言える。ただ、内務の調査官にそこまで感覚的な調査を行えというのも無理な話だ。しかしその余地がある分、ロットバルトは彼等と別の角度から捉える事ができる。

「もう一度、私からは、彼が王に離反する事はないと、そう進言させて戴きましょう」

揺るぎなく言い切ってみせる。

「御前失礼。これ以上軍を空けると職務怠慢で副將に叱責されますので」

優雅に一礼し、ロットバルトは踵を返した。

「ロットバルト。今の師団はお前がいる場所ではない。……ヴェルナー家は、お前が」

今度はロットバルトは立ち止まりもせず、振り向く事もしなかった。

「貴方とその議論をしても仕方のない事だ」

「……ヴェルナー家は、お前が」

今度はロットバルトは立ち止まりもせず、振り向く事もしなかった。

「貴方とその議論をしても仕方のない事だ」

「……ヴェルナー家は、お前が」

今度はロットバルトは立ち止まりもせず、振り向く事もしなかった。

「貴方とその議論をしても仕方のない事だ」

「……ヴェルナー家は、お前が」

従うつもりはない、と言外に言い置いたまま、ロットバルトは扉を閉ざした。

回廊を玄関へと向いながら、先程の話を反芻する。その内容にまるで衝撃を受けなかった訳ではない。だが、レオアリスの一族が反逆者であった事にはない。それはロットバルトにとって、さほどの意味を持たない、過去の事だ。

その事よりも、これほどの事実が今まで隠されていた事に驚きを感じたのだ。隠そうと思つてそう簡単に出来るものではない。そしてまた、その経緯がありながら現在レオアリスが軍にある事も。

それを成し得る者は、王しか有り得ない。

(やはり王か。しかし、どう取るべきなんだ?)

その真意がどこにあるのか、そればかりはロットバルトなどの計り知れない事だ。そこを詮索するには、まだ情報が少なすぎる。

父である侯爵が懸念しているのは、レオアリスがバインドと同じ事態を引き起こし、更に言えば王が一王に剣を向けた時、ロットバルトが第一大隊に在籍していることは、ヴェルナー家にとって都合が悪いものだからだ。

けれどもいかにそうした懸念があるとはいえ、それほどに伏した事実を公爵が自分に向けたからには、事態の方向は——王の意向は、変わったと見ていいのだろう。

(……だからと言って、事態が好転している訳でもない。情報も一面的すぎる)

そう思ったところで裏側を覗き込む術はない。ロットバルトはそれを切り上げて、もう一つの懸念に思考を移した。

バインドが師団に在籍していたのであれば、当時既に第一大隊の中将であったグランズレイが知らない訳はない。クライフとフレイザーはそれ以降に師団へ配属されている。もう一人、ヴィルトール。

先日の演習場でのヴィルトールの反応を思い出し、ロットバルトは溜息を吐いた。軍に剣士が存在しない事に対するクライフの疑問を、いつになく曖昧に躲していた。

(——だが、もうそろそろ、限界だろう)

無理に抑え込めば、その反動は大きい。

侯爵へ告げた言葉はロットバルトの真意ではあるが、最善のやり方で事実を告げた場合の話でもある。その為には、レオアリスが戻る前に、グランズレイと話をする必要があった。

知らず、ロットバルトは師団士官棟へ向かう足を早めた。

ベールは言葉を切り、暫らくの間黙つて、俯いたアスタロトの上に視線を注いでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……あの時の赤子が成長し、剣士として王都に現れた時、当時の戦場を見た者は誰もが危惧を抱いた。バインド以来、軍に剣士はいない。再び同じ轍を踏む事を恐れたからだ。そして、レオアリスがその裡に復讐を抱えていないとは、誰にも言えまい。——だが、多くの危惧を余所に王はレオアリスを迎え、近衛師団に配した」

「——あいつは、何も知らない」

アスタロトの声はどこか怒つたように響く。それに対して、優しささえ感じられる声でベールは頷いた。

「そうだな。あれを育てた村の者達は、レオアリスに何も告げなかったのだろう。——その後はお前もよく知っているとおおり。周囲の危惧はただの懸念に終わった。当時を知る者が見ても、あれの中に復讐の心を見る事はできない」

「当然だ。あいつは王が好きだもん。見てて笑えるぐらい。まるで、親を慕うみたいにさ」

アスタロトらしい言い方にベールは微かに苦笑を滲ませたが、頷いた。

「私も知っている」  
アスタロトはどうしていいか良くわからずに、長椅子の背凭れに頭を預け、肺に溜め込んだ凝った息を吐き出した。そうしてみても、喉や胸に押し掛かった重いつかえは取れない。

「——どう言えればいいんだ。私は判ったら教えてやるって、あいつに約束

したのに」

ベールにこの喉に被さった重しを除いてくれと、そう望んだつもりではない。けれどやはり、ベールはそれを取り除こうとはしなかった。

「全てを話すか、それとも伏すか。二つに一つだ。——だが、全てを知らば、レオアリスはここを離れるかもしれんな」

三

レオアリスがアス・ウィアンから戻ったのは、陽が翳り始めた頃だった。誰もいない執務室を横切ると、上着を椅子の背に投げ出し、背を軋ませて座る。身体の裡に重い疲労がわだかまっている。椅子の手摺に肘を置き、その手を額に当てた。

あの兵士の言葉が、意識の上に点り続けている。

負傷者を収容し終わった右軍を先に帰還させ、レオアリスは暫らく半壊したアス・ウィアンの街を眺めていた。漂う血と肉の匂いは吐き気すら催させるものだったが、それすら意識をしてはいなかった。

感じていたのは、苛立ちだ。

目の前の状況への。それから——

北方辺境軍と師団第二大隊の全滅。

そんな事を、グランズレイが知らない事は有り得ない。

(何で黙ってるんだ)

『過去など、逐一掘り返さずとも良いものじゃ。掘り返したところで、後悔しか生まぬものもある』

そう言ったのはスランザールだったか。

扉を二度、叩く音と共に、グランズレイの声が入室の許可を求める。返事をする気になれず、レオアリスが答えないまましていると、一言断りを入れてグランズレイは扉を開けた。

額に手を当てたまま動かないレオアリスを見て、眉を寄せる。その顔に浮かんだレオアリスを気遣う色に、偽りは見えない。

「上将？ ご気分が優れないようですが……」

普段と変わった様子もなく歩み寄るグランズレイの上に、尖った視線を投げる。

(聞くべきじゃないのか)

グランズレイが黙っているのであれば、それ相応の理由があるのだ。

だが、そう思っているにも関わらず、レオアリスは厳しい瞳を副将に向けた。身の裡に渦巻く疑問が口を衝く。

「……二隊の全滅とは、何だ」

グランズレイが表情を強ばらせ、レオアリスを見た。その表情が、レオアリスの中の苛立ちを一層募らせる。

「……バインドから何かをお聞きになったのであれば、そのような事」

「バインドじゃない」

「――」

黙り込んだグランズレイに苛立ちをぶつけるように、レオアリスは立ち上がり机に両手を叩きつけた。

「黙ってちゃ分からない！ お前はその時軍に居たはずだ！ 知らない訳がない！」

珍しくレオアリスが声を荒げると聞き付け、隣室にいた中将達が何事かと執務室へ姿を見せる。机に手を付いたまま睨み付けるレオアリスの前で、グランズレイは一言も発さず姿勢を正した。

「……何故何も言わない。否定も肯定もしないのか」

「私の一存では、お答え致しかねます」

レオアリスは一瞬深く息を吸い込み、それから何かを飲み込むように顔を伏せた。

「上将……」

「――もういい」

「私は決して」

「いいと言ってるんだ！」

激しい拒絶の言葉に、グランズレイは伸ばしかけた手を止めた。レオアリスは暫らくの間、机の上について両腕で身体を支えるようにして顔を伏せていたが、やがて静かに顔を上げた。

既にそこには先程までの激昂はない。けれど心の底を覗かせない、閉ざされたような印象がそこにはあった。

「怒鳴って悪かったな。――少し、頭を冷やしてくる」

そう言うと、顔を背けるようにグランズレイの横を擦り抜ける。執務室の扉を開けた拍子に、戻ってきたロットバルトに肩がぶつかった。レオアリスの顔に視線を落としたものの、ロットバルトは何も言わずに彼を通し

た。

扉の閉ざされる音が響き、静まり返った室内を見渡してロットバルトが息を吐く。

（……どうにも、予想以上に早く展開しているな）

「……只今、戻りました」

グランズレイは何かを測るようにロットバルトの顔を見つめた。

「侯爵のご用件は済んだのか」

「ええ。お時間を戴きましたが、もう済みました」

二人とも暫らくの間、お互いの反応を探るように黙っていたが、その沈黙に耐え切れなくなったクライフが堰を切る。

「何なんだ、全く。副将、何をやってんですか」

「……持ち場に戻れ」

グランズレイが苦い響きを声に宿す。その言葉に、クライフは苛立ちも露わに一歩詰め寄った。今回の件に関して、クライフは起こった事実しか把握していない。だがその背景に、レオアリスを中心とした何かがあるのだ。

「はあ？ ……状況は分からねエけど、そうやって何かを煙に巻いてるから上将が怒るんじゃないですか。いつものあんたらしくもない、一体」

「クライフ。今はやめておけ」

ヴィルトールがクライフの肩を押さえ、扉の方へ向かわせる。クライフはその手を払ってヴィルトールを正面から睨み据えた。

「今言わねエでいつ言うんだ」

向き合った二人の間に、微かな緊張が生まれる。

「やめましょう。我々が諍しても仕方ない」

フレイザーはそう言って二人の間に入ったものの、やはり翡翠の瞳に納得の色はない。グランズレイに一度だけ視線を投げた。

「――貴男は、もうご自分の中で消化したものだと思ってましたわ。見込み違いなら失礼」

グランズレイが眉をしかめるのを確認する事なく、フレイザーの姿が扉の外に消える。クライフはまだ何か言いたげに口を開きかけたが、吐き出

すように息をつき、踵を返した。

扉の閉まる冷えた音が響く。

ロットバルトは暫らくその場に立ったまま、グランスレイが口を開くのを待っていたが、グランスレイは黙り込み、苦いものを噛み締めるように正面を見つめたままだ。ヴィルトールも壁に背中を預けたまま動かない。諦めて自席に戻り、脱いだ外套を椅子の背に掛けた。

押さえていたものが吹き出して、寒風のように熱を奪っていったように思える。

「……いつまでもこうしていても仕方ありませんね」

グランスレイが視線を上げる。

「侯爵は、どこまで話したのだ」

「どこまで？ 知っている限りの事は全てでしょう。あの方の目的は私に翻意を促す事ですから」

抑捺する口調にグランスレイはロットバルトを睨んだ。翻意を選ぶ事はとしない、厳しい光がその瞳にある。

「お前は、どうするつもりだ」

その様子にロットバルトは思わず苦笑を漏らした。ここでロットバルトの動向を牽制する位なら、レオアリスに誤解を受けるような態度を取らなければいいのだ。グランスレイの気持ちも分からないではない。事実を自分の中に飲み込む事と、それは別の話だ。

だが、過去を封じ込める時はもはや過ぎた。

「上將が今拘っているのは、隠されている事実に対してではないでしょう。貴方がそうして黙っている事にだ。貴方は、上將が王都にいらした折から彼を見てきている。その中で得たものを言葉にするのは、そう難しい事ではないはずですよ」

「……簡単に言ってくれる」

「事は単純なんですよ。私にとってはね。選ぶか、選ばないかだ。——貴方もこれ以上複雑にする事はない」

グランスレイがまだ何も動こうとしないのを見て、ロットバルトは肩を竦め、ヴィルトールに顔を向けた。

「中將。後はお願いします」

ヴィルトールは壁に凭れたまま、瞳だけを上げて呆れたように苦笑を浮かべる。

「結局、私は板挟みのまんまか」

「戻って来るまでに、場を収めておいてください」

「やれやれ」

ヴィルトールが了承の意味で片手を上げるのを見て、ロットバルトは再び執務室を出た。

一度中庭を望む回廊から辺りを見回したが、さすがに姿は見当たらない。

「ロットバルト」

振り返ると、クライフとフレイザーが回廊の柱の間に立ち止まり、クライフがロットバルトを手招く。ロットバルトは彼らの方へ足を向けた。

「何が、どうなってるんだ」

苛立ちを隠さない声にロットバルトは小さく笑った。

「私も最初からあの場にいた訳ではない。まあ大方の予想は付きますが、何があつたんです？」

レオアリスがそれをいつ、どこまでどんな状況で知ったのか、それを把握しなかったが、クライフもフレイザーも首を振った。

「判らないわ。ただ、上將が副將を問い糺すようだったけれど」

「言やあいんだ、何だって。今更隠して何になる。どれ程大した理由かは知らねえけど、まどろっこしすぎるんだよ」

「そうですね。確かに、簡単に口にするには大き過ぎる話ではある。こうなる前に、副將と話をしておきたかったのですが」

ロットバルトの言葉に二人は顔を見合わせ、それから詰め寄った。

「何か知ってるのか！？」

「聞かせなさい！」

「説明すべきでしょうが、まずは上將を探したい。もう少し後に……」

「私が話すよ」

ヴィルトールの声が割って入り、三人は執務室の入り口に顔を向けた。ヴィルトールはクライフとフレイザーを手招き、ロットバルトへは行くと

促す。そのまま執務室に入らずに回廊を歩きだしたヴィルトールの後を追って、クライフはその肩に手をかけた。

「どこにいくんだよ。中でいいだろ？」

「副将には、邪魔の入らない所でじっくり考えてもらった方がいいだろう？」

フレイザーは気遣わしげな瞳を一瞬だけ執務室の扉に向け、それから頷いた。

「まあ、すぐに答えを出されるさ。元々持っている答えだ。さて、ロットバルト、お前もちゃんと上將を見つけてくれよ。説得はお前が一番巧いからね」

どこかのんびりしたヴィルトールの口調に苦笑で応え、三人の姿が別の扉へ消えるのを見送ってから、ロットバルトは改めて考え込むように口元に手を当てた。

レオアリスが一人になる為に行く場所は、大体分かっている。裏庭か、書庫、演習場。裏庭や書庫は大体、呼びに来られる事を見越して行く場合が多い。おそらくは演習場の方だろう。

だが、ロットバルトが行ってそれを告げる事が、問題を解決するとは思えなかった。

開く気配のない扉に一度視線を投げてから、ともかくレオアリスを探そうと回廊の出口に足を向けた時、前方からやってくるアスタロトの姿が見えた。

レオアリスの椅子の背に残された士官服の上衣を眺め、これがなければ少し肌寒いだらうと、グランスレイはそんな事を考えた。

初めて彼が近衛師団に配属された時、グランスレイは一隊の左軍中將だった。今とは逆の立場にあり、レオアリスはまだ十五にも満たない年齢で、今よりもずっと幼さを残していた。

剣士と聞いて不安を覚えなかった訳ではない。だが王が決めた事、何か深い思慮があるのだらうと、そう納得していた。

最初に配属された小隊にはあまり長くはいなかったはずだ。彼の能力がその中では上手く機能しなかった為だ。

強すぎる力は個よりも隊の連携を重んじる小隊には向かず、数日も経たない内に、当時揮下の少將であったフレイザーが相談を上げてきた。王から預かった以上、彼をそのままにしておく訳にはいかなないと考えたのだろう。

「あまりに力の差があります。このままでは、剣士である事が強調され、周囲から浮き上がるばかりです」

「皆と同じ剣を使うようにすればいい」

フレイザーは問題にならないと言わんばかりに肩を竦めた。

「無駄ですわ。すぐに折れてしまう。負荷に耐えられないのでしよう」

フレイザーは判断を仰ぐようにグランスレイを見つめたが、黙り込んだ彼に短く息を吐く。紅い髪に映える翠の瞳が苛立ちを隠さない。

「軍が剣士を忌避している理由は詳しくは知りません。ですが、それは過去の話ですわ。今をどうするか、貴男は決めて戴かなくては」

「珍しい、随分と親身になるな」

「ご覧になって戴ければ分かります」

「……どうしろと？」

バインドの記憶は未だに禍禍しく残っている。まして、レオアリスはその原因ともなった一族の、最後の一人だ。剣士としての凶兆、そして或いは復讐者としての凶兆。どちらも無いとは言いつれない。

「とにかく、一度ご覧になって、ご判断を」

あまり気の進まぬまま演習場に赴いた。フレイザーが示した先に、組む相手も無く演習を眺めるレオアリスの姿があった。

剣士として覚醒したばかりであったせいもあるだろう。どこか自分の力を持って余すように壁に背を預けたまま、隊の演習を眺めている。

フレイザーの無言の視線に押され、グランスレイはレオアリスの許に歩み寄った。

レオアリスとまともに話したのはその時が初めてだっただろう。どこかにバインドの印象が強く、関わる事を無意識に避けていた。

だが、初めて正面から向かい合ったその瞳には、かつてのバインドのよ  
うな翳りは見つけられなかった。真っ直ぐ自分に向けられた瞳。あの時生  
まれて間もなかった赤子がこれほどに成長したのかと、感慨めいた驚きを  
覚える。

黙ったままいつまでも自分を見つめているグランズレイに、レオアリス  
は諦めたように溜息を吐いた。

「俺は、首ですか」

その様子があまりに残念そうで幼かった為に、グランズレイは思わず苦  
笑を漏らした。

「そうではない。だが、隊に馴染まないのも事実のようだ」

レオアリスが唇を噛み締め、肩を落とす。

「しかし、王はお前を敢えて師団にお入れになった。王の為の力になると、  
お考えなのだろう」

弾かれるように顔を上げたレオアリスを見て、グランズレイは思わず息  
を呑んだ。彼がひどく嬉しそうな表情を浮かべたからだ。

その瞳の中にあるのは復讐の意志などではなく、王に対する純粋な憧れ  
だった。

この少年を支える者が必要だ、と強く意識したのはその時だ。

何故そう思ったのかは自分でも明確ではない。だが、軍に馴染めず、王  
都に頼るものもなく、『剣士』という禁忌を背負ったままでは、自らが望め  
ば望むほど、その道行きは苦痛を伴うものになるだろう。

「……無論、我々としてもそうあって欲しいと望んでいる」

今までの自分を言い繕うようだと思った。背後に立つフレイザーが小さ  
く笑うのが分かる。それを隠すように、グランズレイは殊更厳しい表情を  
浮かべた。

「何故、王に仕える気になったのだ？ 村の者達は反対しただろう」

自分で口にしてから、ひやりと肝が縮んだ。それは彼の過去を直接指摘  
しているようなものだ。

だが、レオアリスはその言葉に深い反応を示さなかった。考えを巡らせ  
るように首を傾げる。

「……何故って言われても。ただ、御前試合があるって聞いて。確かに爺  
さん達は反対したけど」

彼の養い親達は、彼に何も告げていないのだろうか。

あの過去を？

おそらくはそうなのだろう。理由など測りようもないが、レオアリスの  
言葉には自分の過去を知っている様子は少しも見られなかった。

「さすがに、偉そうな事言っ出てきちゃったから、今更王都じゃ通用し  
ませんでした、なんて帰ったら、叩き出される」

まだ少年らしい発想に、グランズレイは再び苦笑を漏らした。

「通用しない事はない。……暫らく、私の下で軍を学ぶといい」

四

一気に吹き出した苛立ちは既に鳴りを潜めていたものの、完全に消えた訳ではなかった。

情けない態度だと自分でも判ってはいた。本来なら、あの場で飲み込んでおくべき事だったのかもしれない。けれど、どうしても出来なかった。

(何でなんだ)

誰も彼も、知っていながら隠す。そうしながら、意味ありげな視線を向けてくる。一体何を自分に望んでいるのか、それが判らなくてもどかしい。

ふと、レオアリスは瞳を上げた。

バインドが自分に告げた事は、おそらく偽りではないだろう。

なら、自分がここにいる事は、果たして望まれているのだろうか。

自分は？

水気を失い始めた草を踏む微かな音を捉え、レオアリスは振り返った。

レオアリスが寄りかかっている演習場の壁伝いに、歩いてくるアスタロトの姿が見えた。

ゆっくり歩み寄りながら、アスタロトは鮮やかな紅の瞳でレオアリスの顔を見つめる。レオアリスの顔に昇ったいつもは見せる事のない戸惑った表情に、小さく笑った。

「情けない顔だな」

アスタロトの指摘に、レオアリスが自嘲するように口元に笑みを浮かべる。その笑みをアスタロトはただ黙って眺めた。

告げるつもりでここに来たのに、いざ本人を前にすると言葉が出てこない。喉も胸も、いまだに重い。先ほどの声は少し掠れたが、気付かれなくて良かったと思った。

(いつも通りに笑え)

アスタロトはレオアリスに真っ直ぐ視線を向ける。

レオアリスの過去がどうだろうと、何も関係ない。アスタロトはレオア

リスに会ってから、結構楽しい。おもねる事も、距離を置く事もなく、身もない。

『アスタロト』を継承した時から、そんな相手はもう望めないと思っていた。だから余計、嬉しかったのだ。

レオアリスは、自分がアスタロトだと知った後も何も変らなかった。当たり前前の事だ。自分も変らない。

二人は演習場に張り巡らされた壁に寄りかかるようにして座った。顔は中央の広場に向けたまま、アスタロトが懐かしむような響きで口を開く。

「……覚えてるか。初めて会ったときのこと」

「忘れる訳ないだろう。まだあれからそんなに経ってない」

ひどく長い時間が過ぎた気がするが、レオアリスが王都へ来てからまだ三年も経っていないのだ。

初めて出会ったのは、西方の深い森の中だ。まだレオアリスが剣士として覚醒する前の事で、初めは術士として王都に上がるつもりでいた。王の御前試合には参加資格が必要で、レオアリスはその資格を得るための途上だった。

「最初、食おうと思ったんだよな」

レオアリスは前を向いたまま眉根を寄せ、何の話なのだろうかと一瞬考へ込んだ。

「——誰を」

「お前」

「……はあ？！」

慌ててアスタロトを振り返ると、アスタロトは何故かうっとり瞳を細めている。

「だって、森ん中をずっと歩き回ってて、すっごい腹減ってたんだもん」

「——こいつ、マジっぼい……」

「……うあ……」

とんでもない事をさらりと口にされ、レオアリスは頭を抱えて胡坐を組んだ膝の上に屈み込んだ。

「信じらんねえ」

レオアリスとしては、村を出て、ほぼ初めて巡り合った相手が目を疑うほど可愛い少女で、少しばかり、正直に言えば当時はかなりどぎまぎとしていたのだ。それがよもや、食われかかっていたとは。

(丸呑み？ やっぱ丸呑みか？)

「食わなくて良かった」

レオアリスの苦悩は知らず、呆れて上げられた顔を見つめ、アスタロトは、と悪戯っぽく笑った。ほっそりとした腕で両膝を抱え込んだまま首を傾げ、からかうようにレオアリスの顔を覗き込む。

「面白かった。へっぼい術でさー、御前試合に出ようなんて、いい根性だと思つて」

「……うるせえな」

「自分が剣士だつて事も知らなくてさ」

アスタロトは膝の上に顎を載せ、目の前の広い演習場に視線を戻した。

「お前が、王都に来て良かった」

レオアリスは浮かべていた呆れと抗議の入り混じった表情を消し、漆黒の瞳でアスタロトの横顔を眺める。二人の他に誰の姿も無い演習場内は静かで、遠くの街のざわめきがここまで微かに届いていた。

アスタロトの言葉が、黄昏時の冷えた風に力強く刻まれる。

「何があつても、私はお前の友人だからな。忘れんなよ」

真っ直ぐに自分に向けられた深紅の瞳。その瞳を見返す。

「——話せよ。聞いたんだろう」

「聞いた」

『全てを話すか、それとも伏すか。一つに一つだ。だが、全てを知れば、レオアリスはここを離れるかもしれない』

ベールの言葉がちらりと頭に浮かぶ。

それでも目の前のレオアリスの瞳には、過去を受け止めようとする色がある。

「なら、頼む。知りたいんだ」

(大丈夫)

アスタロトはもう一度その顔を見つめ、息を吸い込むように唇を開いた。

「——十七年前、北方で反乱があった」

アスタロトは言葉を紡ぐ。それはまるで刃物のように、喉を切り裂く感じがした。

「反乱を起こしたのは、レオアリス、お前の一族だ」

束の間の沈黙の後、レオアリスの瞳が大きく見開られる。

色を失ったその瞳に、アスタロトの裡に一瞬強い後悔が生まれた。

だが、伝えると決めたのだ。既に口火は切った。今さら消し去ることなどできはしない。

迷いを振り切るように、アスタロトは声の響きを強めた。

「詳しい経緯は知らない。ただ切っ掛けは、剣士の一人が辺境軍の小隊を切り捨てた事だつて話だ。——多分、お前の育った村の者が詳しいだろう」

『反乱』——。

その言葉は、初めまるで意味のある言葉として頭に入つてはこなかった。

自分の、一族が、

誰に対して……？

軍に。

——いや。

それは雷光のようにレオアリスの脳裏に閃いた。

王に。

「——は」

笑おうとしたのに、声は出ない。喉が引きつるように震えただけだ。

強い眩暈を覚えて、レオアリスは乾いた草の上に片手を付き、上体を支えた。開いた片手が無意識に胸元の青い石の飾りを握り込む。

漸く、判った。誰もが口を閉ざし、触れないように秘していた訳。

バインドのあの言葉。

眩暈がする。

まず浮かんだのは、当然の疑問だ。

「……何で、俺はここにいるんだ？」

王の敵を排撃すべき近衛師団に、何故。

アスタロトは口を閉ざし、俯いたレオアリスの顔を覗き込む。

「……大丈夫か？」

「……ああ」

足元が、柔らかい綿にでもなったように頼りなく感じられる。地面がそこにある事を確認するかのようになり、レオアリスの指が枯れかけた草を握り込んだ。草は容易く千切れ、吹き抜ける風に舞う。

だが、最初の衝撃が過ぎれば——、その二文字はやけに空虚に感じられた。

実感などない。

そんな立場の自分が今ここに居る事を疑問に思いはしても、反乱を起こした自分の一族に対する、同調も反発もない。

それは彼等が顔も知らない、遠い存在だからなのかもしれない。

「……まだ先は長い。続けるぞ」

レオアリスが黙ったまま頷くのを見界の端に収めながら、アスタロトはボールから聞いた話を感情を交えない声で淡々と反復していく。そうしないと、何も言えなくなる気がする。

「——戦いは長引いた。配備されていた北方軍には、鎮圧する力はなかった。まあ、相手が剣士の一族じゃ仕方ない。けど、圧倒的優位に立ちながら、不思議と反乱は辺境から広がる事は無かった。だから、反乱の理由は不明確なんだ」

片膝を抱え込み、その上に顎を載せるようにして演習場の広場に顔を向けたまま、レオアリスは黙ってアスタロトの言葉を聞いている。

「暫らく戦局が動かないのを見ると王は師団を送った。バインドがいたからだ。バインドは当時、並ぶ者のない剣士だったらしい。……最初は、バインドが上手く反乱を抑えかけたかに見えた。——でも」

同じ剣士との戦い。

剣を交え、相手を切り裂く内に、バインドは狂っていった。

「……狂った？」

レオアリスの瞳が形容しがたい色を浮かべ、アスタロトに向けられる。身の裡で、剣が微かに脈打つ。

「そうとしか言い様が無かったみたいだ。敵も味方も、構わず斬りはじめたんだから」

「——」

当時の戦場からの急使、事後の調査、それらから次第に形を帯びた戦場の様子は、誰をも絶句させるに足るものだった。

バインドは徹底的に切り刻んだ。

手当たり次第、敵味方関係なく。

少しでも、目の前に動くものは全て。

北方軍、師団ともに、死者の半数以上は、敵ではなく味方であるバインドによって命を断たれたのだ。

バインドはあらゆるものを切り裂きながら、やがて剣士の里に辿り着いた。その頃には、既に反乱軍と鎮圧軍という図式は崩れ去り、バインドを抑える事こそが、戦いの目的に刷り変わっていた。

それが

「唐突に——」

バインドが消えた。

そして、

「そこに、お前がいたんだ、レオアリス。赤子だったお前は、バインドが消え、お前の一族が滅びた後の村に、ただ一人残されていた」

炎の中に泣き声を上げていた赤子。

遠からず焼かれて命を落としていたであろうその赤子を、炎の中から救い上げたのは、王自身だった。

王が何故そうしたのはかは判らない。反乱を起こした一族が既に滅びた今、もはや咎を負う必要もないと、そう考えたのか。

赤子は、剣士の里のすぐ近くにあった村に預けられた。

口を閉ざしたアスタロトの横で、レオアリスは黙ったまま、自分の手の上に視線を落とした。交わす言葉もなくただ座っている二人の足元では、枯れかけた芝が、落ちかかった長い陽に細かな陰影を作っている。

やがて深い溜息をついて、アスタロトは静かに立ち上がった。まだ座り込んだままのレオアリスに視線を落とす。

「――私は行くよ」

見上げたレオアリスの上には、アスタロトが恐れていたような感情の色は見つけられ無い。だがもつと感情を露にされた方が、不安を感じずに済んだかもしれないと、そう思った。

「……私が言ったこと、忘れんなよ」

アスタロトの表情に、レオアリスが苦笑を浮かべる。

「なんて顔してんだ」

不安が、おそらく顔に出ているのだろう。

「ふん。お前のせいじゃないか」

むっとして顎を逸らしながらも、いつもと変わりの無いレオアリスの口調に、漸くアスタロトの胸の裡が少し軽くなった。レオアリスが肩を竦め

る。「悪かったな。……少し、混乱してるだけだ」

アスタロトはその顔を暫らく眺めていたが、一つ溜息をつく、腕を伸ばしてレオアリスの頭をぼしつと叩いた。

「さっさと帰れよ。お前の隊、お前の事心配する奴らばっかじゃん。ガキじゃないんだから、あんまり心配させんな」

アスタロトと別れても暫くの間、レオアリスは演習場に張り巡らされた壁に背中を預けたまま、次第に暮れて行く空を眺めていた。

探していた過去は、自分の想像以上のものを秘めていた。だが、それをどう受け止めるべきなのか、全く見えてこない。

指先が胸元にかけた青い石の飾りを弄ぶ。

『お前自身の為じゃ』

スランザールの言葉が、脳裏を過り、ふと瞳を上げる。

レオアリスがここで今までやってこれた理由、それは一重に彼等の態度の故ではなかったか。

敵愾心や自分を疎む気持ちの見える者もいたが、グランズレイやアヴァロン、スランザール、そして、王。

過去を知っているはずの彼等の中に、自分に対する負の感情を感じた事はなかったように思う。

王は何を思って、自分をその懐に受け入れたのだろうか。

自分に何を望んでいるのだろう。

レオアリスがその剣を向けるとは考えていないのか。

(……剣を、向ける?)

何故だろう。いくら自分の心の中をさらってみても、その考えはまるで見つかからない。もつと時を置き、その事実を自分の中で現実として捉えたならその思いが生まれるのかもしれないが、今はそうは思えなかった。

赤い落日が長い影を差す。斜陽に染められた演習場は、まるで炎の中にあるように感じられた。

この色は好きではない。眩暈がする。

ぐらりと深淵に踏み込みかけた意識が、それを切り裂いた焔に引き戻される。

その焔を知っている。

(――バインド)

師団第二大隊と北方辺境軍、そして、自分の一族を滅ぼした男だ。

周囲を焼く赤い炎。

自分はそれを見ていたのだろうか。

レオアリスの中の剣が、どくと鼓動を刻む。

バインドを斬る。それが今レオアリスのすべき事だろう。

だが、何の為に？

王城に侵入した者としてか。エザムとアス・ウイアンを焼いた者としてか。

それとも、自分の一族を滅ぼした者としてか――。

どれも、今のこの曖昧な迷いを打ち消す程の相応しい理由には思えなかった。

レオアリスは立ち上がると服に付いた草を払い、演習場の門へと歩き出した。そうしたものの、その足をどこへ向けるべきか決めかねている。

このまま師団に戻って、それでどうすればいい？

いつも通り、何も無かったように振る舞えるとは思えない。

「――」

厩舎にはハヤテが待っている。ハヤテの翼なら、一晩も飛ばせば故郷の村に着けるだろう。

(爺さん、元気でやってんのかな……)

口の中で呟くと、堪らなく祖父の顔が見たくなかった。それはただひたすら、その想いだけだ。

全て放り出してあの家に帰ったら、祖父は何と言うだろう。怒るだろうか。

(だって、何でもないじゃないか)

ここで。

この場での、自分の立場は、何だと言うのだろうか？

反逆者か、王国の兵か。

周囲は、どちらである事を求めているのだろうか。

厩舎の木戸を押し開けると、銀翼の飛竜が待ちかねたように長い首をもたげた。レオアリスへ首を伸ばして背に乗れと促す。首筋に手を置くと銀の鱗はひやりと心地よい手触りを伝える。

「――お前、北に行くか？ それともどこか行きたい所はあるか？」

ハヤテは丸く青い瞳を不思議そうに瞬かせ、再び帰ろうと云うように首に置かれたレオアリスの手を押しした。

この飛竜は、大将に任じられた時、王から賜った。疲れを知らない疾い翼が気に入っている。北の辺境にも半日程で辿り着く。

だが、王から賜ったものだ。

レオアリスは首を傾げるハヤテを見つめた。

「……悪いな。今日はここで休め」

レオアリスは一度その首を軽く叩き、置いていた手を下ろした。ハヤテが呼び止めるかのように高い声を上げるのを、背中で断ち切るようにして厩舎の扉を出る。

演習場は王都の周辺部にあり、正面の道は王城に向かい、左右へ延びる道は王都の外周を巡りながら各方面の街道と繋がっている。ここから北方に行くには、北の街道は正反対の位置にあった。外周をぐるりと回るよりも正面の道を城下に向った方が近道になるが、当然のごとくそれには王城の傍を通る事になる。

行く先を未だ決めかねたまま、レオアリスはいつもの習慣で正面の道を歩き出した。

左右を木立に囲まれた石畳の道を辿ると、すぐに巨大な門が聳える。門は常に万人に開かれており、それを過ぎると城下の街に入る。門の向こう、夕闇が迫る街には、至る所に明かりが灯り、旅人に長い道行きの終わりを知らせていた。

門を潜った瞬間、それまでの牧歌的な風景は一変し、雑多とした色彩が互いに争うような、賑やかな街並が広がった。そこかしこに燭蛾の灯りが溢れ、昼とは違った喧騒に満ちている。

王都は各地から様々な種が集まる坩堝であり、特にこの辺り、下層と呼ばれる地区は雑多な感が強い。酒、賭博、喧嘩、流血沙汰も珍しいものではない。陽が落ちると袖を引く街娼達の姿が街角に立ち、半ば公然とそこにある遊廓。地下では禁制品が売買され、表に出ることのない商業網が確立されている。

以前行ったミストラ山脈の街の闇など、ここは比較にならない。  
世界の中心に開く巨大な花が、その広げた花弁の一枚一枚に抱え込む複雑な影。

自分も、その影の中の一つにいるのだろうか。

レオアリスは王城の外門へと続いている広い道を選んで歩く。陽が落ちてきたこの時分の方が、この辺りは賑やかだ。通り沿いに犇めき合う屋台、立ち並ぶ店は建物の二階や地下にまで軒を競っている。

ただ慣れない者が一人で歩くには少し危険を伴う場所でもある。道端や屋台の奥に屯しているのは、一癖もありそうな顔ばかりだ。左右には細い路地が幾筋も伸びていて、その奥は迷路のように複雑に入り組んでいる。

吹き抜ける風に肌寒さを覚え、レオアリスは今更ながらに上衣を着てこなかった事に気が付いた。陽が落ちた後では、薄い半袖の服一枚だけでは不十分だ。

周囲の建物の窓に灯る明かりが、温度を持って感じられる。

(……そう云えば、クライフはこの辺に住んでたな)

込み合った街並みに目を向けて歩いている内、ふとクライフが王城から遠い下町に好んで住んでいる事を思い出した。中将ともなれば王城内の士官区に官舎が支給されるのだが、この辺りは種々様々な住人達がいて面白いのだと言っていた。

あの後どうなっただろう。彼等の戸惑った顔が脳裏に浮かぶ。引っ掻き回すだけ引っ掻き回して、何も言わずに出てきてしまった。

彼等が、事実を知ったら、どう思うのだろうか。

レオアリスはピタリと足を止めた。それでいて、止まった足に不思議そうに瞳を落としている。

(……行こう)

促すように思ってみても、止まった足は動く気配を見せない。

第一、どこに行くと言うのだろうか。

地面に貼りついたように動かない足は、問いかけてくるようだ。

どこに？

(知らない。でも、ここで立ち止まったって仕方ないじゃないか)

もう一度歩き出そうとした時、不意に肩に何かが勢い良くぶつかり、レオアリスは体制を崩して石畳に片手を付いた。荒れた怒鳴り声といくつもの軽い塊が降りかかる。

「道の真ん中でボケツとしてんじゃねえ！」

片手を付いたまま振り返りかけた肩を、再び靴底が蹴り付ける。石畳に打ち付けそうになった肩を押し留め、身体を起こした。

「なん……」

訳の判らないまま、レオアリスは漸く振り返り、自分の前に立ちほだかっている男を見上げた。

「てめえのせいで大事な商品を落としましたじゃねえか。どうしてくれるんだ」

見回すと、石畳の上に藤で編んだ籠が散らばっている。どうやらぼうつと道の真ん中に立っていて、ぶつかっただけらしい。

レオアリスは足元の籠を手にとってひっくり返してみたが、どこも壊れた様子もない。

「……拾うのは手伝うよ」

差し出した籠を、男は乱暴に払った。

「バカか、てめえは。弁償しろって言ってんだよ！」

気の弱い者であれば竦み上がりそうな声音だったが、レオアリスは石畳に座ったまま、ただ空になった手を振った。

「壊れてないだろう」

レオアリスの様子に男は僅かに面食らったように顎を引いたものの、すぐ殊更に口元を歪めて見せた。こんな場所でぼうつとしているのは、いい鴨以外の何者でもない。

「おいおいおい、正気で言ってるじゃねえだろうなあ？」

男はレオアリスの胸ぐらを掴み、引きずり上げると、威嚇するように顔を寄せた。

レオアリスは眉をしかめ、視線だけで周囲を見回したが、通りにいる者達は見て見ぬ振りで足を早めるか、面白い見ものでも眺めるように笑いを浮かべているだけだ。要は難癖を付けるたかりのようなものかと、レオア

リスは溜息を吐いた。

(めんどくせえ……)

「汚れちまっただろうが。これじゃ商品になんねえだろ、なあ。てめエがボケッと突っ立ってやがるからよお」

「避けりゃいいじゃないか」

「てめえ、誰に向かって口利いてんだ?! 俺は」

レオアリスは溜息を吐き、胸元を掴んだ腕を手の甲で跳ね上げると、素早く掴んで背中捻上げた。関節が反対方向に捻られて軋み、男は途端に悲鳴を上げた。

「いい加減にしろよ。不当な商売は……」

「そう言い掛けて、レオアリスはふと口をつぐんだ。」

(何やってんだ、俺)

こんな場所で乱闘でもするつもりなのか。それとも、師団の権限で取り押さえるか。

そうするのは簡単だが、全身に貼りつくような億劫さを感じた。

そもそも、今の自分にどこまでその資格があるのか。

「おい、若いの。いい加減手を放しな。ここで調子に乗って、後でどうなるか判ってんだろうな?」

横合いから声がかかり視線を向けると、今までただ道端で眺めていた男達の一人が立ち上がっていた。周囲に屯していた男達の目付きも変わっている。

「……こいつが難癖を付けて来たんだろう」

「調子に乗るなって……」

「待て、そいつは師団だ」

別の一人が詰め寄ろうとした男を制し、レオアリスを指差す。

「師団!?!」

驚いたように周りの男達も改めてレオアリスを眺めた。確かに、軍服の上衣が無いために判りにくいのが、両脚の脇に入った独特の銀線を認め、男達は躊躇うように顔を見合わせる。

それは全く違う躊躇いの表情だったが、レオアリスは無性に苛立ちを覚

えた。

「……師団だったら、どうだって言うんだ」

苛々と男達を睨み付ける。こんな時に騒ぎを起せば、ただ問題があったというだけでは済まないかもしれない。ちらりと過ったその考えに、更に苛立ちが増した。どうでもいいとさえ思う。過去の、師団だの、自分にあるのはそんなものばかりだ。

様子ばかり伺っていないで、決めてくれればいい。

「中途半端じゃ、気分が悪いだろ」

だが男達は既に関わる気が失せたようだ。氣勢を削がれた顔で、道の端に座りなおす。

「意気がるんじゃねえぜ、若いの。そいつを着てるから無事で帰れるんだ」  
勝手に自分の立場を判断されているのが、気持ち悪い。

師団とは関係なくなるかもしれないんだと、そう言ってやったらどうなるだろう。

「師団兵さんよ、さつさとそいつを放して消えちまいな」

レオアリスは何か言おうかと口を開きかけたが、結局何も言わずに唇を引き結んだ。

苛立ちは、気持ち悪さに取って変わっている。どうでもいいから、早くこの場を離れたかった。

捻り上げていた男の腕を放すように放し、踵を返す。

暫くの間、周囲の視線はレオアリスに注がれていたが、やがて興味を失って逸らされた。

早足で歩く内に、気持ちの悪さも影を潜めていく。一つ息を吐き、レオアリスは歩調を緩めた。

大通りの少し先の右手に、中層区へ抜ける為の『門』が見えてくる。通りはまだ先へ続いているが、通りの流れに乗るように、『門』へ足を向けた。『門』には扉の変わりに、薄く光を放つ幕のようなものが張られている。通り抜ける瞬間に一瞬だけ浮遊感を感じたものの、すぐにそれは消えた。

『門』抜けたそこは既に中層区との境で、水路が道を横切るように流れていた。いつ通っても、良く出来た仕組みだと思ふ。王都の術士達の技術

には感心させられる事ばかりだ。先程の場所から歩けば、ここまで一刻以上はかかる。

ただ、それだけの距離を一瞬にして移動した事によって、正面に聳える王城の影もまた、急速に濃さを増した。結局のところ、何の答えもないままに、次第に距離は近づいて来ている。レオアリスは一度だけ背後の『門』を振り返り、僅かに躊躇う素振りを見せたものの、再び歩き出した。

水路に架かるゆるやかな半円を描く橋を渡る。その橋を越えると、街の様相が僅かに変わり、商人や職人達の多く住む地域に入る。この辺りには、商店や職人達の工房が区域内に数多く存在している。通り添いの店はまだ軒を開け活気に満ちていたが、先程の下層区とは水路一本隔てただけで、落ち着いた佇まいを見せていた。

とりとめもなく、石畳の道を歩く。歩く事で考えが纏るかと思っただけ、思考はあちこちに飛ぶばかりで一向に向かう道を見出しそうには無かった。

ふと眼を上げると、前方から数名の師団兵が近づいてくるのが見え、レオアリスは咄嗟に横道に逸れた。路地の壁に背を預け、王城からの帰途なのだろう、彼らが通り過ぎるのを見送る。

第一大隊の兵では無い事にほっと息を吐き、それから自分の行動に情けなさを覚えた。黒い生地 of 服は、あちこち砂埃に塗れていたが、払う気にもなれなかった。

(さっきから何やってんだ、俺は)

今も別に隠れる必要はない。自分の過去がどうであろうと、今立場が変わった訳でもないのだ。レオアリスは自嘲の息を吐き、路地の壁に寄り掛かったままその場に座り込んだ。

細い路地には誰の姿もない。そのまま壁に頭を預けるように頭上の狭い空を見上げる。暮れていく空に、星が輝き始めている。

(何をするつもりなんだ)

曖昧なのだ。全部。

怒りがあれば、畏れがあれば、悲嘆や喪失、憎しみ、その一つでも自分の中に明確にあれば、足を向けるべき先もまた明確だっただろう。

それら全てが曖昧な故に、どこに進むべきか、それが判らなかった。  
(――何を、したいんだ)

もう一度自分に問い掛けた時、緩く傾斜のついた路地の奥から微かな金属音が響いてくるのに気付き、レオアリスは視線を向けた。

複数の金属音が何かを弾くように規則正しく流れている。レオアリスは咄嗟に入ったこの路地がどこに続いているのか、今更ながらに思い出した。立ち上がり、僅かに躊躇ってから、音の流れってくる方へと歩き出す。おそらく追い払われるだろうと思いつながら、今はそれが無性に見てみたかった。

金属音は次第に大きく、高くなっていく。

緩やかに登る路地を抜けると、面前に小さな丘が開ける。丘の周囲にはまた王都の街並みが続いていて、家々の窓に灯る灯火が、光りだした天空の星々よりも明るく散りばめられていた。

開けたその場には、煉瓦造りの黒ずんだ壁をした小屋が三棟立っていた。地面を覆う短い下草が小屋の周囲に行くほどに、小屋から後退するように黒い土を覗かせている。三つの小屋の一つから、止まる事を知らない金属音が流れていた。

開け放たれた戸口に近づくにつれ、周囲の温度が上がっていくのが感じられる。レオアリスは戸口の前で足を止めた。

覗き込むと、小屋の中には一層強い熱気が満ちていた。中央に鉄を溶かす炉が明々と燃え、その周囲では数名の鍛冶師達が黙々と、手にした鎚を赤く焼けて輝く鉄に振り下ろしている。

打ち下ろす度に火花が散り、鉄が少しずつ形を変えていく。周囲を一瞬、強い輝きで照らし出す。

それは生命の煌めきのように美しい、息の詰まる光景だ。鍛冶師達が一心不乱に剣に魂を注ぎ込んでいく。

ふいに、戸口の傍で剣を打っていた鍛冶師の汗と熱で赤く染まった顔が上がり、入り口に立つレオアリスの姿を捉えた。

老齢に近いその鍛冶師は、途端に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ口を開きかけたが、ふと口を閉ざし、じっとその姿に視線を注いだ後、手

元に視線を戻した。

剣を傍らの水桶に浸ける。たちまち激しい音を立て、水蒸気が立ち昇る。鍛冶師は黒く沈んだ色を取り戻した鋼を、燃え盛る炉に差し込んだ。

普段ならレオアリスが入り口に近づくと目を閉じただけで、怒鳴りつけて門前払いを食らわせるはずのこの鍛冶師が、今は一言も発さない事は、逆に僅かな居心地の悪さすら感じさせた。

「……見てていいのか。」

鋼を打ち延べる複数の音が重なり、さほど広くは無い鍛冶場の中に響いている。鍛冶師はちらりとその視線を投げただけで、片時も手を休めず鎚を振り下ろし続ける。

「そこから近寄ンじゃねえぞ」

ぼそりと告げられた渋みを含んだ声に、レオアリスは心外そうに苦笑を漏らした。

「いくら何でも、近寄っただけで折れる訳ないだろう」

「信用なんねえ。一体何本俺の打った剣を折りやがったと思ってるんだ」

にこりともしない鍛冶師の前に、レオアリスは戸口に手をかけたまま視線をさまよわせた。他の鍛冶師達は視線すら寄越さない。

炉と剣が放出する熱に汗塗れになりながら、黙々と鎚を振るい続ける姿に、これほどまでに精神を傾けて打ち上げる剣を次々と折られるのでは、確かに腹に据えかねるどころではないのだろうと、そう思った。

「悪いと思ってる」

「悪いで済むか。ひとが魂込めた剣をよオ」

相変わらず手を休める気配も無いが、乱暴な物言い程には、その声に嫌悪の響きはない。

「大体何の用だ？ お前が使える剣はここにやねえぞ」

「ただ、見ていただけだ」

レオアリスがそう言うのと、鍛冶師は荒っぽい動作で肩を竦めた。

「けッ、物好きナガキだ。剣士がこんなモン見て、何が面白いんだか」

「面白い。——まるで、剣が、命を得ていくみたいだ」

鋼から飛び散る火花、振り下ろされる鎚の音。一振り一振りに込められ

る魂。

その音を聞き、一瞬に燃え上がり散っては消える火花の輝きを見ていると、余計な思いが全て流れ落ちていく気がする。

波打っていた心が深い湖のように凪ぎ、その底に沈んでいる想いを覗き込めそうな気すらした。

「……ふん、好きにしる」

再び鎚を振り上げ、打ち下ろす。水に浸し、炉に戻す。

次第に形削られて行く剣。意思を持たないそれは、使い手に何をもらすのだろうか。

鍛冶師は打ちかけの剣を目の前に持ち上げ、暫くためつすがめつ検分していたが、やがて小さく舌打ちして手にしていた鎚を振り上げると、一息に叩き折った。思わず息を呑むレオアリスに構わず、折れた鋼を再び炉に投げ入れる。

「おい、せっかく……」

「納得いかねえ」

そう吐き捨てて、鍛冶師は厳しい表情のままレオアリスを見上げた。

「見せてくれ」

唐突に請われて、レオアリスは思わず辺りを見回した。

「何を」

「何をだあ？ 寝呆けてンじゃねえぞ。決まってるだろうが、テメエの剣だよ」

鍛冶場で剣士が剣を抜く事に僅かに躊躇いを覚え、鍛冶師の浅黒い顔を見つめる。だがその上にある真剣な表情に、レオアリスは鳩尾に右手を当てた。

ずぶり、と手首まで呑まれ、洩れ出した青白い光が鍛冶場に満ちる。

呼び合うように響いていた鎚の音が止まり、鍛冶師達が顔を上げた。

右手をゆつくりと引き抜く。

宵闇を切り裂く光と共に現れた長剣に、鍛冶師達の口から溜息にも似た声漏れた。

目の前の青白い光を纏う剣に視線を吸い寄せられたまま、鍛冶師は感嘆

を隠そうともせず、半ば独り言のように呟いた。

「簡素な剣だ。何の気負いもてらいもねえ。……それがこれほど、見る者を惹き付ける」

引き寄せられるように手を伸ばして刀身に触れ、剣を受け取る。だがレオアリスの手を離れた瞬間、剣は輝きを消した。

「ちッ、つれねえ奴だ。主以外に興味がねえか」

一度名残惜しそうに掲げて見上げた後、レオアリスに戻すと、剣は再び美しい輝きを纏った。

「いい剣だ。俺達が目指してるのは、こんな剣なのかも知れねえ」

レオアリスの顔に目を止め、太い眉を上げる。

「何、妙な面してやがる」

「……いや、誉められるとは思わなかった。嫌われてると思ってたからな」  
意外そうな響きに、鍛冶師はしかめ面を浮かべてレオアリスから視線を逸らした。

「ふん。こんな剣、嫌える刀打ちあいねえよ」

そう言つて背中を伸ばすように立ち上ると、鍛冶師は汗と熱で贅肉の削げ落ちた身体をレオアリスに向けた。

「変な野郎だな、テメエは。怒鳴られんのが判つてんのにしょっちゅう来やがる。バインドはこんなとこ、見向きもしなかつたぜ」

あまりにもあつさりとその名が語られた事に、驚くレオアリスの横を抜け、戸口で立ち止まる。

「テメエ等、手エ休めんな。……おい、風に当たんねえか」

レオアリスの返事を聞きもせずさっさと小屋の外に出ると、戸口のすぐ脇の壁に寄り掛かり、懐から煙管を取り出して火を灯した。黙つたままのレオアリスに構わず、吸い込んだ煙を吐き出す。白く細い煙が踊るように立ち昇り、鍛冶師の視線がその煙を追って動いた。

「……どうやら生きてやがるらしいじゃねえか」

「——知ってるのか」

「知ってるも何も、俺あ奴が掛け値無しに嫌いだった。野郎の剣は独善の剣だ。他の誰の為のものでもなく、ましてや王の為ですらねえ」

吹き抜ける風が、煙管から立ち昇る煙を吹き散らす。

「俺達あ、王の為に剣を打つ。毎日毎日汗水垂らして肌あ焼いて、そりや全部王の為だ。その先にある国の為だ。テメエの隊がしじゅう剣をぶつ壊してくれてもよオ、そんなら次あもつといい剣を打つてやる」

少しも和らぐ事のない目元に、だがどこか暖かさを感じさせる色を浮かべ、鍛冶師はレオアリスを見た。

「お前を嫌いじゃねえのは、それが結局同じ事だからよ。——お前の剣が、王の為にあるからだ」

弾かれたようにレオアリスが瞳を見開くのを、可笑しくもなさそうに眺め、ひよい、と煙管を裏返すと火種を足元に落とした。火の消えた煙管を銜え直し、レオアリスに背を向ける。

「ま、その内テメエでも折れねえ剣を打つて見せらあ」

鍛冶師が小屋の中に消えると、すぐ新たな鎚の音が響き始めた。その確かな力強い音を聞きながら、レオアリスは戸口の横に立ち止まったまま、自分の鳩尾に視線を落とす。

(王の、為の——)

鍛冶師の言葉は、温かい血が全身に行き渡るように、身体の隅々に染み込んで行く。

身の裡の剣が、ゆつくりと鼓動を刻む。

思わず込み上げた笑いを抑えるように、レオアリスは瞳を閉じた。

ひどく単純で、だが一番大事な事を、忘れていた。

——何の為に、自分は王都に来たのだったか。

状況に囚われ過ぎて、見失っていた。

自分が今ここにいるのは、王に仕える為ではなかったか？

明確な理由などない。

それでも、育て親の反対に耳を傾ける事も無く、頼る当てもない王都に一人こうしてやってきたのは、その漠然とした、けれども強い想い故だ。過去や立場など、始めから無い。

閉じていた瞳を上げる。

そこに、強い光を宿した。

僅かに迷ったものの、レオアリスは再び演習場へ戻った。長い時間師団を開けてしまったが、先ずは置いてきてたものを連れ帰らなくてはいけない。

背後では王都が光を型どって夜の闇にくつきりと浮かび、そこから届く僅かな薄明かりの中、秋の虫達の音色が競うように聞こえてくる。久しぶりに感じた穏やかな夜の気配だ。

人影の無い演習場の門を潜り、すぐ右手にある厩舎の木戸を押し開ける。厩舎の中は灯りが抑えられ薄暗かったが、僅かな光源でも光を纏う銀翼の姿はすぐに見て取れた。飛竜の前に見覚えのある影があるのに気付く、レオアリスは思わず足を止めた。

ロットバルトはレオアリスの姿を認めると、左腕を胸に当て深く頭を下げたまま、レオアリスが歩み寄るのを待った。ゆっくりと頭を挙げ、レオアリスの上に視線を落とす。その頬に微かな苦笑が過ぎる。

「……また随分と埃塗れになられたものだ。一体何をされていたんです？」  
気が付けばまだ服のあちこちに、白く砂埃がついたままだ。

「いや、まあ……」

さすがに下層で揉め事になりかけたとはみつともなくて言えず、レオアリスは曖昧に口の中で呟いて、服の埃を払う。

ここに誰かがいるとは思っていなかった為少し驚いたものの、それでも目の前にいるのがグランズレイでは無かった事に僅かに安堵を覚え、それから苦笑に似た溜息を洩らした。

どんな顔をしてグランズレイと向き合えばいいのか、いまだに躊躇っている。しかし、いきなり顔を合わせずに済んだと安堵する反面、ある種の落胆も感じていた。

「……良くここが分かったな」

「簡単な事です、と言いたいところですが、ここまでしか貴方の情報が無かったもので。八方手分けして探させる訳にも行かないでしょう」

「……」

確かに、それは余りに情けなき過ぎる。レオアリスが飛竜の柵に歩み寄ると、ハヤテが嬉しそうに長い首をもたげて顔を摺り寄せる。レオアリスは艶やかな鱗に手を当て、詫びる代わりに数度叩いた。

「それで、ずっとここに？」

「師団に戻られるのに、貴方が彼を置いていく訳がない」

師団には戻らなかったかも知れない。そう言おうかとも思ったが、今更それは大した意味の無い仮定だと気付く。

「私もまあ、居ませんでしたとただ帰るのでは、面目が立ちませんからね。」

父に偉そうな事を言った手前もある、正直申し上げれば、ここに戻って戴けてほっとしましたよ」

「……侯爵に？ 何を……」

問いかけて、皮肉を込めて口元に笑みを浮かべたロットバルトの顔を眺め、口を閉ざす。ロットバルトはある意味で一番、事実を伏せていた側に近づけるところにいるのだ。軍内にばかり目を向けていてそこまで思い至らなかつたが、ただ思いついたとしても、それをロットバルトに頼むという気にはならなかつただろう。そこはレオアリスの関われない、複雑な部分だ。

「……余計な事をさせたな」

「特には。まあたまには会話くらい必要ですよ」

レオアリスはすぐ隣のロットバルトを見上げた。

「——聞いたんだろう」

「聞きました」

余りにもあっさりと言つてのけられ、レオアリスは次に言うべき言葉を捜して口籠った。だが灯りを落とした厩舎内の薄闇の中でさえ、ロットバルトの顔にこれまでと違う色は認められない。柵に片手を置いて、開いている手でハヤテの頭を撫ぜる。ハヤテは何故主がいつまでも自分に乗らないのか、不思議そうに青い瞳を瞬かせている。

「——それで」

「それで、とは？」

問い返されてレオアリスが再び口籠もると、ロットバルトは声に可笑し

そうな色を滲ませた。

「今更私の意見など、必要の無い顔をされていますが？」

確かにそれで自分の意思が変る訳ではないのは分かっていたが、敢えて口に出したのはその事を確認する為だ。

「率直な意見を聞きたい」

ロットバルトは一度レオアリスの顔を見返し、口を開いた。

「では、私の個人的な見解を述べさせて戴きますが……。関係ありませんね」

「……はあ？」

「貴方の過去がどうであろうと、大して問題ではないと、そういう事です」  
あつげに取られて目の前の参謀官を見つめる。

「私は貴方の背景を見て、貴方に仕える事を選んだ訳ではありません」  
「——随分、簡単に……」

悩んだ自分が滑稽に思える。だが、結局はそういう事なのかもしれない。  
今思えば、アスタロトもまた同じ事を言っていた。

「貴方もそうでしょう。」

「？」

「貴方が王に仕える事と、貴方の背景とは関係ないはずだ」

レオアリスは驚いた瞳をロットバルトに向けた。そのまま暫く黙っていたが、やがて俯くと、小さく笑い始めた。すぐに肩を震わせ、声を立てて笑う。

「……相当俺は、自分を見失ってたらしいな」

迷っている自分よりも先に、周囲の方が正しい答えを見つけている。多分、そういうものなのだ。落ち着いて振り返り、ゆっくりと自分と周囲を眺めれば、答えはどこかしら存在している。

どう選ぶか、それだけの事だ。

「シスファン大将との面会について報告を上げようと思っていました、  
たった半日の間に随分状況が変わりましたね」

ロットバルトの言葉にレオアリスは改めて頷いた。バインドがアス・ウィ

アンに現れた事も、アスタロトが語った過去も、たった半日の間に起こっ

た事とは思えない程だ。

だが、疲労を感じていたのはそれまでの事で、全ての事実が見えた今、  
逆にわだかまっていた疲労はきれいに流れ落ちていく。

道は選んだ。後はそれを進むだけだ。

その前に一つだけ、きちんと筋道を付けておかなければならない事がある。

「……師団に戻る。それから」

ロットバルトが軽く片手を上げ、レオアリスの言葉を遮る。視線を上げた先の顔が、面白そうな笑みを浮かべた。

「どうやら、あまりにお戻りが遅いので、心配になったようですね」

「？」

ロットバルトの視線が既舎の扉へ向けられる。それを認める前に聞き慣れた足音を捉え、レオアリスは扉を振り返った。

足音は既舎の入り口で躊躇うように一瞬止まり、それから扉を押し開けた。再び入り口のすぐ傍らで静かに立ち止まってから、グランズレイは既舎の薄い光の中に踏み込むと、無言のまま頭を下げた。

つい先程までどんな顔をして会えばいいのかと、躊躇いすら感じていた

相手を前にして、レオアリスはほんの一瞬だけ気まずそうに視線を落とした。けれど、すぐにその視線を真っ直ぐにグランズレイへと向ける。

長い事レオアリスはグランズレイに眼を向けたままだったが、やがて静かに口を開いた。グランズレイの耳に届いたそれは普段より固い響きだが、

そこに恐れていた色はない。

「もう一度だけ聞く。バインドの事を、知っているな？」

グランズレイは覗き込む漆黒の瞳を見返した。常に正面から向けられる瞳。この瞳から逸らさない事が、彼を信じる証といえた。そして、グランズレイが選んだ道でもある。

「知っています」

「俺が軍に……。王都に来る前からか」

「そうです」

レオアリスはグランズレイを見据えたまま、僅かに眉を歪めた。呆れた

響きと共に肺から大きく溜息を吐き出す。

「まったく……」

三年間、それを知りながら、ずっと自分を支えて来たのかと、感嘆とも苦笑ともつかない思いが湧く。

一度眼を伏せ、それから再び視線を上げた。そこにあるのは、いつもと変わらない強い意志の光だ。

「王にお会いする。その手続きを取ってくれ」

「お会いになって、何を」

だが聞かずとも、その眼の光から、答えは判っていた。

「決まってる。——王から直接、バインド討伐の許可を戴く」

王を守護すべき近衛師団の将として、バインドを討つ。レオアリスが出した答えに、グランスレイはゆっくり頷いた。

「早速、王へ上申いたしましたよう」

グランスレイは一度姿勢を整えると、左腕を胸に当てる。深く上体を折った。

ここには、それを伝える為に来たのだ。

「お戻りを——劍士レオアリス」

七

執務室の扉を開けると、思い思いの場所で黙り込んでいた中将達がさっと顔を上げた。入って来たレオアリスの姿を確認し、緊張した面持ちで立ち上がる。

一番初めに口を開いたのはフレイザーだった。

「——おかえりなさい」

柔らかい笑みと単純なその言葉が、僅かに躊躇いを覚えていた気持ちを溶かす。思えば初めて師団に配属された時も、フレイザーはこうして笑って迎えてくれた。

「……ただいま」

レオアリスが照れくさそうな顔をしながらも頷くと、クライフがほっとしたように息を吐いて、それから大腿で歩み寄った。

「探しに行こうかと思ってたんすよ。ロットバルトに任してたら、日が暮れたって戻ってこねえし」

にやりと笑ってレオアリスの前に立つ。扉の前にいたロットバルトはただ肩を竦めた。

「ヴェルトールから大体は聞きました。正直言って驚いたなんてモンじゃないんですが、でもそれよりも先ずは腹立ってんですけどね」

そう言うとクライフは一旦言葉を切り、唇を曲げ眉をしかめてレオアリスを眺めた。

「水くせえですよ。上将も、副将も。言ってくれりゃ、いくらだって手伝ったのに」

「お前が口を出したら、事をややこしくするだけだ」

ヴェルトールの言葉に、クライフは首を巡らせて後ろを睨み付けた。

「そういう所が十分ややこしいっつーの。大体お前だって黙ってたくせに口出すな」

「全てがお前のように単純じゃないんだよ。残念だけど」

「てめえ、本っ当」

「悪かった。——一人で何とかしようってのは、考えが甘すぎた」

ヴィルトールに身体を向けかけていたクライフの前で、レオアリスは静かに頭を下げた。クライフが慌てて手を振る。

「やめてくださいよ。頭を下げて欲しいとかそんな事言ってるじゃなくて」

「そうです。大将がそう簡単に部下に頭を下げるものじゃ」

「もう一つ、勝手を言わせてもらおう」

中將達は顔を見合わせ、それから姿勢を正した。

「——一隊に、バインド討伐の許可を戴くつもりだ。直接は俺が出る。ただ命が下されれば、動いてもらう事になるだろう」

バインドの力は既にエザムとアス・ウイアン、それよりも十七年前の一件で証明されている。軍を動かす事は、例え最終的にレオアリスがバインドを倒したとしても、犠牲を出す事も考えられる。

「これは俺個人の問題でもある。だから、選んでくれて構わない。」

必要なのは王の下令であって、彼等の犠牲ではない。バインドを抑える事が出来るかと問えば、正直に言ってしまうれば、その確信はまだレオアリスの中には無かった。

「——それが水くせエって言うんですよ」

「当然、上將がどうお考えだろうと、私達はそのつもりですわ」

「よく、考えて……」

もう一度、促すように彼等を見回した中で、ヴィルトールが灰銀色の瞳を真っ直ぐにレオアリスに向けた。

「結局どの時点であっても、軍とバインドとの衝突は避けられません。現時点で師団が出ず、——貴方が出なくとも、バインドは同じ事を続けるでしょう。結果が同じなら、早期に手を打った方がいいと思いますよ。」

ヴィルトールの言葉に全員が頷く。クライフはもう一度、にやりと笑った。

「決まりですね。まあ、ロットバルトにきっちり戦術考えて貰いましょう。人探しは苦手だろうけど、当然本来の役割だ、いい手考え付くよな？」

向けられたからかう視線をロットバルトは事も無く返す。

「剣士相手に策ですか。私なら先ず、退けと言いますがね」

「役立たね……」

扉が開き、グランズレイが戻ってくる。室内を一度見渡してから、レオアリスの前に立ち、一礼した。

「王への面会の許可が下りました。すぐにお会いいただけると仰せです。仕度を整え、王城へ参りましょう」

「今……？」

こんなにも早く面会が叶うとは考えていなかった。瞳を見開いたレオアリスへ、グランズレイが促す表情を向ける。

レオアリスは瞳を伏せ、自分の鼓動を数えた。

一つ、二つ、三つ——

意志は変わらない。

王に目通りする事を考えれば、過去を知った今でさえ、震えるような喜びを覚える。

何故と問いかけても、答えのない感情だ。

瞳を上げる。

「——行こう」

そう言うのと踵を返し、レオアリスは扉へと足を向けた。

冷えきった王城の廊下を歩きながら、グランズレイは数歩先を行く年若い上官の背を見つめる。壁の所々に設けられた灯火が、レオアリスの姿を夜の闇に浮かび上がらせ、また闇に溶かしていく。

闇に溶けた先に、今よりももう少し背の低い彼の姿が浮かぶ。

レオアリスは兵法などを始めとする様々な知識を、驚くほどの速度で吸収した。グランズレイや他の中將達と戦術を論じ、その切り口に驚かされる事もしばしばあった。

次第に戦場において功を立て、確実に彼の師団内部での位置は固まってきた。剣士が禁忌となったその理由を知ることの一部の者以外には、曖昧模糊とした剣士への忌避よりも、その剣の強さに対する驚嘆の思いの方が強くなっていった事もある。

レオアリスが師団に配属されてから半年も経たない内に、隊内での剣士

に対する否定的な見方は、ほとんど消えていた。レオアリス個人によるものも大きかっただろう。連携を重んじる隊というくびきから少し離れた位置に身を置けば、レオアリスはすぐに誰とでも親しくなった。

レオアリスを中將に、そして大將に推したのはグランズレイだ。

グランズレイはかつてのレオアリスの姿と、今日の前を歩く彼とを比べるように、もう一度その後姿を見つめた。

思えば初めてレオアリスと正面から向きあつた時から、こうして彼の下に付き、彼を支えるようになる事を、何の違和感もなく受け入れていたように思う。

今まで上官だつた者を飛び越えて、急に命令を下さなければならぬ立場になり、レオアリスは当初随分戸惑つていた。その事に煩わしさを感じていたと言つてもいい。できればあまりしがらみのない場所に居たかつただろうレオアリスを大將へ推したのは、そこが最も彼の能力が生かされる場所であろうと考えた故だ。

周囲に軽んじられる事のないよう、事ある毎に口調を改めさせ、それも今ではすっかり板についている。尤も、どこか砕けた飾り気のない態度だけは変わる事はなかったが、それは逆にレオアリスの魅力でもあり、表面では嗜めはするものの本気で改める必要はないと思つてゐる。

まだ青年とも呼べない程の若い將だが、今ここを越えれば、おそらく彼はその先に、もっと大きな未来を向かえるだろう。

可能であれば、自分がそれを見届けたい。

謁見の間の前まで来ると扉の前で立ち止まり、レオアリスはグランズレイを振り返つた。促すように頷いてみせると、レオアリスは再び扉に向き直る。

巨大な両開きの扉は音も立てず、ゆっくりと開いた。

広大な広間には、扉から深緑の絨毯が最奥の玉座へと真直ぐに敷かれ、その左右には一抱えもある柱が等間隔に並び高い天井を支えている。定例の謁見の際などには、その奥にずらりと諸侯が控えるが、今はそこには誰

の姿もない。レオアリスは足音を吸収する絨毯の上を玉座へと進んだ。

一段高く造られた玉座へと昇る階段の前に、左右に分かれて立つ四つの影がある。それを認め、グランズレイは小さく息を呑んだ。

四大公——ベール、ベルゼバブ、ルシファー、アスタロト。

(定例の謁見ではないのに、彼等が顔を揃えるとは……)

「王に対して僅かなりと翻意が見えれば、いつでも討てるように」

グランズレイの思考を読んだかのように、ベルゼバブが低く忍び笑う。

「そう見えるか？」

向けられた身を凍らす冷たい瞳に、グランズレイは心臓を掴まれるような感覚に陥つた。ベルゼバブは四大公の中で、最も冷酷な男だ。冗談めかしてはいるが、もしレオアリスの上にそれを見たと思えば、躊躇いも無く手を下すだろう。傍らのレオアリスをちらりと見たが、レオアリスは彼等へ真つ直ぐに顔を向けたままだ。

「よせよ、バカ。言うだけ無駄なの判んない？」

アスタロトの呆れた声がその場の緊張を溶かし、グランズレイは漸く息を吐いた。アスタロトの横に立っていたルシファーが穏やかな笑みを二人に向ける。波打つ漆黒の髪を首の辺りで短く揃え、暁の空のような紫の瞳を持つた、アスタロトとはまた違う透明な美しさを持つ女性だ。

「そう構える事はないわ。レオアリスが王都に来た時こうして迎えたように、今この場を見届ける為にいるだけ。そして我々が、この場の証人となる」

レオアリスは彼等の前まで行くと、その前に片膝を付き、深く頭を下げた。壇上の玉座は、今はまだ空のままだ。

鼓動の音が響くように感じられる程の静寂の中、ベールが低く告げた。

「御前だ」

一斉に四大公が片膝を付く。

微かな衣擦れと共に玉座の背後の長布が左右に開き、その奥の扉から、

アヴァロンを伴つて王が姿を現した。

一度その場を睥睨し、玉座へゆつたりと身を預ける。

広間が、王の力に満たされ張り詰めていく。四大公すら、その空気に僅

かに身を震わせた。

王が玉座へと着いたのを確認し、ボールは顔を上げ、レオアリスへと視線を向けた。

「直接の口上を認める」

跪いたまま、レオアリスは頭を下げた。

「近衛師団第一大隊大将レオアリス、御前での拝謁を賜り、恐悦に存じます」

「バインド、か」

伏せていた瞳を上げると、王はレオアリスの上に金色の瞳を投げた。低く流れる声に、レオアリスは一層深く頭を垂れる。

「畏れながら申し上げます。バインドが向かったと思われるのは、北の辺境です。本来管轄でない事は十分承知の上です。——第一大隊に、バインド討伐のご命令を」

四大公がそれぞれ、僅かに視線を交わす。

「面を上げよ」

王の言葉に、レオアリスは伏せていた上半身を起こし、壇上の玉座に座す王に視線を向けた。

身を覆い尽くす、強大な力の波動。それはこの広間の隅々にまで余すところ無く満ちている。

心地良さと畏怖とが、跪いたレオアリスを覆う。

「……そなたはバインドについて、どこまで聞いた」

「——私自身に、関わる事を」

グランズレイには、自分の鼓動の音が、広間に割れ鐘の如く響き渡るように思える。長い間、誰も何も言おうとせず、その時間は永遠のようにも感じられた。

王は玉座の肘置きについた右腕に頭を預け、暫らくその瞳をレオアリスの上に注いでいたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「師団を動かす許可は与えられん」

その場の全員が、呪縛を解かれたかのように、身じろぎをして王に顔を向ける。

視線を落とし言葉を失ったレオアリスを見て、グランズレイは思わず伏せていた顔を上げた。

だがグランズレイが口を開こうとする前に、アスタロトが壇上をきつと見上げる。

「何故です！？ レオアリスが離反すると、そう思ってるなら」

王の元に詰め寄りばかりのアスタロトの肩を、ルシファーがやんわりと押さえる。

王は彼等の驚きや戸惑いを前に、低く笑った。

「勘違いをするな。バインドを相手に軍を動かす事は、無意味だと言っておるのだ。それはそなた達も良く判っているように」

玉座の背に預けていた体を起こす。ゆらりと、広間全体の空気が揺らいだ。

「剣士レオアリス」

弾かれるようにレオアリスは顔を上げた。

「バインド討伐はそなた自身に命じよう。見事打ち倒し、我が前に戻れ」

一度だけ、大きく瞳を見開き、レオアリスは深く頭を下げた。

暗紅色の長布を翻して王が玉座を立つ。全員が首を垂れ見送る中、玉座

の背後の扉の前で、王はふと足を止めた。

「——まだ、そなたは全てを聞いてはおるまい」

訝しげに王を見上げるレオアリスに、深い金色の瞳を注ぐ。その瞳の中に読み取れる感情は無い。

「そなたの養い親に会うといい」

問いかける間もなく、王の姿は扉の奥へ消えた。

「上将お一人で、行かれるのですか!？」

「そんな馬鹿な事、何で呑んで来たんです!」

一人執務室に戻ってきたグランスレイの言葉に、クライフやフレイザーがグランスレイに詰め寄る。ヴィルトールとロットバルトは非難こそ口にしながら、その顔の上には到底承服しかねる色が浮かんでいる。

「バインド相手に軍を出す意味はないと、王はそのおつもりで命を下された」

フレイザーは不服そうに目の前の顔を睨んだ。

「ではせめて、我等のうち一名だけでも、上将の傍にお付けください」

グランスレイは考え込むように彼等の顔を見渡した。王は軍を動かす事は認めず、レオアリスにだけ討伐を命じた。

確かにたった一人で行かせる訳にはいかない。だが、その事が王に背いたと指摘される事にも繋がりがかねない。王からではなく、他の諸侯から。

批判の糸口をこれ以上広げさせるべきではない。

「――ロットバルト。上将に付いて、北方へ向かえ」

ロットバルトは微かに目を見開き、それから笑った。

「私の立場なら、それほどの咎を受けまいとお考えですか」

ロットバルトの指摘に、グランスレイは僅かに口籠る。彼の本来の身分を考慮したのは事実だ。ヴェルナーという地位を背景に持つロットバルトならば、諸侯の批判の声は封じ込める事が出来る。

「……そういう意味だけではない。お前なら預かる隊も無く、かつて上将に伴って郷里を訪れた事もあるだろう。それ故、適任と考えたのだ。不服か?」

「いえ。喜んで参りましょう。まあバインド相手では、私が力になれる事はほとんどないでしょうが」

グランスレイは不器用だと、ロットバルトは心の内で笑う。ただ違うと言えぱいもの、彼の性格ではそれはできないのだろう。

今回その実直さが少しばかりの不安を招きはしたが、だからこそレオア

リスもまた、彼に全般の信頼を置いているのだ。

「上将は一刻後、夜明けと共に発たれる。戻って準備をし、再びここへ」

「承知しました」

夜明けまで、それほどの時間は無い。ロットバルトはグランスレイに一礼すると、踵を返して扉に向かった。

王都を覆う夜の帳が、ゆっくりと西に後退していく。澄んで冷えた大気が、厚い石造りの城内にも静かに染み込んで、それが全ての音を吸収しているかのように思える。王の執務室の中にもその冷気が室内を覆うように漂っていた。

「レオアリスは、北方へ向かいました」

傍らに立つアヴァロンに視線を向け、王は無言のまま頷く。

養い親に会えば、レオアリスは十七年前に時起こった事とその理由の、全てを知るだろう。知った時に、どうなるのか。

自分を憎み、敵対する者となるか。

それとも。

王は何かを期待するかのように、薄く笑みを浮かべた。

それからふと、次第に白み始めた夜のしじまに金色の視線を注ぐ。

あれはいつの———この戦場でだっただろうか。

もう既に遙か遠い過去のようにも、昨日の事のようにも思える。時間は王にとって、それほど意味を持たずに流れていく。

あれは、バルバドスの戦乱の折だ。ならば三千年ほど前の事か。

あの時の彼等は、王国の要請に応えて戦場に赴いた。

あの、剣士。

一度だけか、直接話す事があっただろう。

屍の山の上、紅い夕日と返り血を全身に浴びて、笑った——。

『不思議なものだ。俺達は闘う為に生まれる。他と馴れ合わず、受け入れず、ただ切り裂く者としてのみ、存在する』

『それなのに時折、心に入り込んでくる者がある。ほんの些細なきっかけからかもしれないし、命を捧げる程の想いからかもしれない』

『ただ、そうなれば、俺達は“剣”だ。その相手、それだけを守るための剣として、自らの生にもう一つの意味を得られる』

あの剣士は、未だその相手を得ていないと言っていた。

『剣士にとって、その剣を捧げるべき相手を得る事は、何ものにも変えがたい喜びだ』

『私も、そのような剣を得たいものだ』

『いずれ得られるだろう、王よ。貴方なら』